年　報 2

昭和58～60年度

1985. 3

山梨県埋蔵文化財センター

序

1982年に当埋蔵文化財センターが開設されて以来、今年で4年を経過いたしましたが、中央自動車道の全線開通により県内の開発事業は急増してきております。このような状況下での調査も多くなってきており、1983年から今年までに行なわれた発掘調査件数は県下全体で140件に及んでおります。この間、当センターでは中央自動車道建設に伴う調査結果の整理、報告書の刊行事業などを行ないながら、農林水産省が設置する笛吹川沿岸畑地灌漑用水管工事に先立つ調査、県道建設に伴う事前調査、県の大規模開発計画に先立つ八ヶ岳東南麓遺跡分布調査など、長期にわたる事業に着手してまいりました。また、風土記の丘公園整備事業に伴い、国史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳の遺構確認調査を3カ年計画で実施いたしました。各調査の結果につきましては、逐次詳細な報告書を刊行する予定でおりますが、本概報では取りあえず1983年度から1985年度まで3カ年間の調査の概要を報告するものであります。本書によって当センターの事業概要をご理解戴ければ幸いに存じます。

一方、県内市町村が実施する発掘調査も盛んになり、多くの成果が上げられております。中でも甲府市の大坪遺跡では「甲斐国山梨郡表門（かいのくにやまなしのこおりうわと）」と刻書された土師器の皿が出土しましたが、これは古代甲斐国の郷比定に有力な史料であります。さらに一宮町の松原遺跡では、「石禾東（いさわひがし）」、「林部（はやしべ）」、韮崎市の中田小学校遺跡では「葛井（ふじい）」と墨書された土師器の皿が出土しておりますが、これらの遺物も古代甲斐国の歴史を解明するためには極めて貴重な史料であります。このような重要な発見は今後もなされることと思いますが、関係機関のご努力を期待いたします。

1986年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　磯　貝　正　義

目　次

昭和58年度の概要 …… 1
　一の沢西遺跡 …… 2
　手古松遺跡 …… 4
　勝沼氏館跡 …… 4
　市川北遺跡 …… 5
　藤岱遺跡 …… 5
　八ヶ岳東南麓遺跡分布調査（第１次） …… 6
　史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳（第１次） …… 6
　久保屋敷遺跡 …… 8
昭和59年度の概要 …… 9
　村上遺跡 …… 10
　飯田１丁目遺跡 …… 11
　柳坪遺跡 …… 13
　八ヶ岳東南麓遺跡分布調査（第２次） …… 15
　丘の公園14番ホール遺跡 …… 16
　後呂遺跡 …… 19
　浜井場遺跡 …… 19
　史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳（第２次） …… 20
　上野原遺跡 …… 21
60年度の概要 …… 22
　かんかん塚（茶塚）古墳・杯塚 …… 23
　上の平遺跡 …… 24
　駒井遺跡 …… 26
　於曽屋敷 …… 28
　切附遺跡 …… 29
　智光寺遺跡 …… 30
　弥二郎遺跡 …… 30
　横畑遺跡 …… 32
　八ヶ岳東南麓遺跡分布調査（第３次） …… 34
　史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳（第３次） …… 36
その他の事業 …… 38

昭和58年度の概要

(1) 58年度事業概要

今年度に当埋蔵文化財センターで行った調査は、県道拡幅工事に伴う韮崎市大草町の久保屋敷遺跡を始めとして、農林水産省が行う笛吹川沿岸畑地灌漑用水管埋設工事に先立つ一の沢西遺跡・勝沼氏館跡・藤垈遺跡・市川北遺跡・手古松遺跡や風土記の丘建設工事に伴う国史跡銚子塚古墳附丸山塚の範囲確認調査・八ヶ岳東南麓の遺跡分布調査が行われた。久保屋敷遺跡を除いた3遺跡の調査は文化庁の補助金を受けて実施した。

一の沢西遺跡は昨年度実施した北一の沢遺跡の隣接地である。銚子塚古墳と丸山塚古墳の調査については、史跡整備事業に必要なデータ・・を得るため今年度は墳丘と周溝の遺存状況を把握し、59年度は丸山塚古墳の石室の位置や墳丘の段の有無、60年度は銚子塚の墳丘や石室の位置、埴輪・葺石の状況を把握することを目的とした3箇年事業の初年度である。八ヶ岳東南麓の遺跡分布調査は、清里を中心とした大規模開発計画が立案されているため、事前に遺跡の分布を把握することを目的としてやはり3箇年計画で着手した初年度である。この八ヶ岳の分布調査では旧石器時代の遺跡が新たに確認された。八ヶ岳の山梨県側でこの時期の遺跡が発見されたのは初めてであり、今後この時期の調査を進める上で極めて重要な意味をもつものであろう。

また整理作業は中央自動車道建設工事に伴って調査した二之宮遺跡（奈良・平安時代）・釈迦堂遺跡・石橋条里遺跡・倭の下遺跡・蔵福遺跡・北堀遺跡・姥塚遺跡・四ツ塚遺跡・東新居遺跡を行なった。報告書を刊行したのは、東八代郡一宮町所在の北堀遺跡（縄文時代中期・奈良・平安時代）・同所在東新居遺跡（中世初頭）・同所在豆塚遺跡（縄文時代晩期・古墳時代後期）・東八代郡八代町・境川村所在の石橋条里遺跡（平安時代）・蔵福遺跡（中世）・倭の下遺跡（中世）・笛吹川沿岸畑地灌漑用水管埋設に伴い昭和53年度に調査した塩山市所在の牛奥遺跡（縄文時代中期）である。

② 各地の概要

北巨摩郡下を中心に54年度から昨年まで当埋蔵文化財センター・・が行ってきた県営圃場整備事業に伴う調査は、今年度より地元教育委員会で実施することに、また中央自動車道全線開通に伴う地域開発が盛んになってきたため、地元教育委員会が行う調査が急増し、それに伴って多くの成果があげられた。長坂町教育委員会で調査した小和田館跡は、まったくその存在を知られていなかった中世遺跡で、空堀・地下式土壙・石組井戸・掘立柱建物址等が検出され、遺物は鉄釉水滴・天目茶碗・硯（木原新七郎と裏面に線刻）が出土した。甲府市教育委員会が調査した大坪遺跡では、「甲斐国山梨郡表門」と箆で書かれた坏が出土した。一宮町教育委員会で調査した松原遺跡からは「石和東」・「林部」と墨書された坏が出土した。韮崎市教育委員会で調査した坂井南遺跡では峡北地方で初めて方形周溝墓が検出された。

一の沢西遺跡

所 在 地　東八代郡境川村小黒坂字一の沢
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和58年10月3日～12月20日
担 当 者　長沢宏昌，中山誠二
調査面積　トレンチ調査も含め，約2,500m²

一の沢西遺跡は御坂山系に含まれる名所山，春日山の山裾と曽根丘陵との接点に位置し，遺跡は北西方向に張り出した台地上に立地する。標高は420m前後を測る。

調査は10m幅で約250mに及ぶ。水管埋設工事は尾根を横切るように行われるため，調査区域内の比高差は15mに及ぶ。また，尾根の頂部から谷部までが含まれるため，頂部から斜面にかけては全面調査，谷部はトレンチ調査とした。谷部では地山である礫層までの間に黒色土の堆積がみられたが，すぐに水が湧く状態であり，遺構，遺物は確認されなかった。遺構は頂部から斜面にかけて存在した。

調査の結果，縄文時代の住居址12軒（前期1，中期10，後期1）と土壙113基（前期～後期で中期が主），古墳1基を確認・調査した。縄文中期の集落遺跡であることが確認されたが，主体となるのは中期中葉，井戸尻Ⅲ式期であり，広場・土壙群・住居が同心円状に並ぶ「環状集落」の一部であることが判明した。該期の住居址は東に4軒，西に1軒とに分かれ，その間隔は最も遠い部分で86m，近い部分で70mを計り，その間に土壙群・広場が存在する。なお，広場の幅（東西の土壙間）は30mを計る。このような井戸尻期の環状集落は山梨県内でははじめての確認である。また，調査区東端にも該期の住居址1軒が確認されたが，この住居址は前年度に調査された北一の沢遺跡の集落に続くと考えられ，遺跡名は違っているものの両者は同一の遺跡で，少なくとも二つの集落から成ると考えられる。

遺物は井戸尻Ⅲ式土器が多量に出土しており，中期中葉末の良好な資料となった。とくに，4号住居址出土の一括資料（写真）や土壙内出土の土器はいずれも資料的空白を埋めるのに十分な資料と言えるものである。井戸尻Ⅲ式土器は，山梨県内では様相が不明な点が多かったが，井戸尻Ⅰ式から曽利Ⅰ式の間を埋める該期の土器は3段階に分けられる可能性が強いことが明らかとなった。このなかには，従来井戸尻Ⅰ式とされていた4単位の塔状把手を有する大型の深鉢が多く含まれており，この一群が井戸尻Ⅲ式に伴うものであることも確認された。また，新しい部分では文様のうちのいくつかの要素が曽利Ⅰ式に引き継がれることが改めて確認され，中期中葉～後葉への変遷をみることができたのも大きな成果であった。

そのほか，後期では柄鏡形の敷石住居址が調査された。居住部は六角形を呈するもので，一部に攪乱を受けていたが保存状態は良好であり，考古博物館敷地内に移転・復元される予定である。また，4号住居址からは，現存高15cm程の朱彩された土偶上半部が出土しているが，復元高はかなりの大きさとなり，大型土偶として特筆される。

一の沢西遺跡 4号住居出土一括土器

手古松遺跡

所 在 地　東八代郡境川村小黒坂字手古松
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和58年10月24日～11月11日
担 当 者　長沢宏昌，中山誠二
面　　積　750㎡

手古松遺跡は，御坂山系に含まれる名所山、春日山の山裾と曽根丘陵との接点に位置し，標高約400ｍを測る。遺跡から東方１㎞に狐川が，西方500ｍに境川が流れるが，本遺跡周辺では両河川の氾濫の影響は認められない。調査対象区は西方に向けて傾斜する山裾の小さな尾根の西側にあたり，西端に沢が走る。

発見された遺構は，古墳時代後期の住居址１軒である。住居址平面形は，南北5.5ｍ，東西５ｍの方形プランを呈し，主軸は磁北よりやや東に傾く。壁高は遺構確認面より50cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がる。柱穴は４本で入口部分に梯子受けのピットを設ける。住居址東側と西側の床面には夥しい量の焼土と炭化材が認められ，住居の上屋が火災によって焼け落ちたものと考えられる。出土土器は合計28点を数え，器種も坏形土器，椀形土器，鉢形土器，手づくね土器，甕形土器，深鉢形土器，甑形土器など豊富な内容をもつ。

勝沼氏館跡

勝沼氏館跡位置図

所 在 地　東山梨郡勝沼町勝沼
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和58年12月14日～15日
担 当 者　長沢宏昌，中山誠二
面　　積　1,000㎡

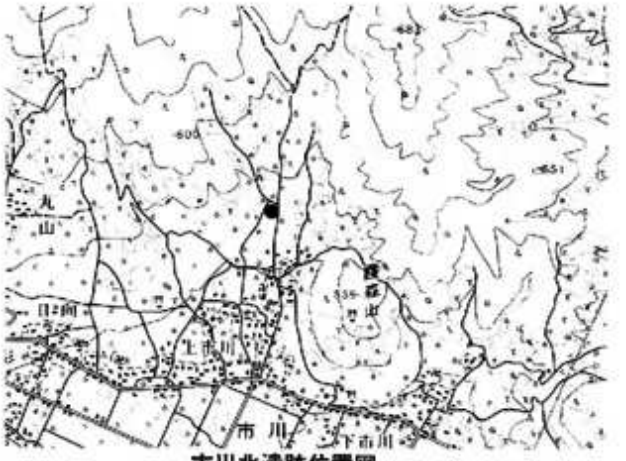
勝沼氏館跡は甲府盆地東部の日川右岸の河岸段丘上の標高420～430ｍに立地する中世の館跡である。館跡の南側を流れる日川は，大菩薩嶺に源をもち，柏尾付近から扇状地を形成しつつさらに西流を続け，笛吹川と合流する。この日川が甲府盆地へ流れ出る周辺地域には，岩崎氏館址や大善寺など中世遺址や建造物も少なくない。

本館跡は，昭和48年県立ワインセンター誘致のための事前調査において，中世遺構の良好な遺存状況が確認されたため以後５年間に７次にわたる調査が行なわれた経緯をもつ。

今回の調査対象区域は，館跡中核部より東方400ｍに位置するため，これに関連する土塁等の施設の存在が予測された。試掘調査の結果，表土下20cmの個所から水田の床土と考えられる鉄分堆積層が確認されたのみで，館跡にかかわる遺構等は発見されなかった。

市川北遺跡

所 在 地　山梨市市川字平丸
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和58年11月10日
担 当 者　坂本美夫，米田明訓



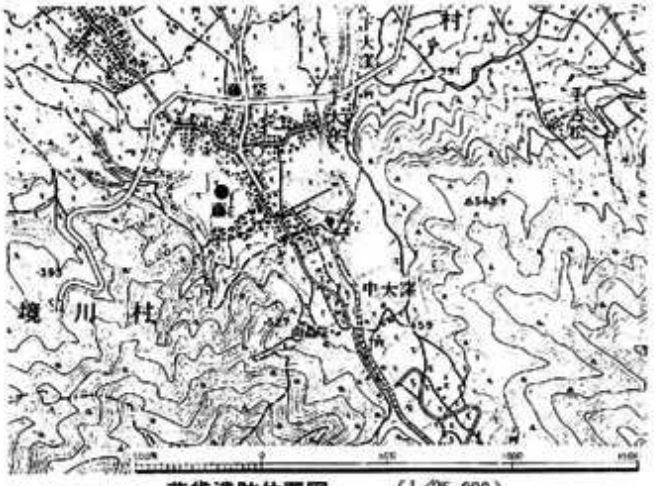
市川北遺跡位置図

市川北遺跡は，標高845ｍの天狗山山腹の南斜面に立地し，南方には兄川によって形成された扇状地がひらけている。遺跡の東側は標高539ｍの霞森山が南方にせり出しており、遺跡から東方への視界をはばんでいる。本遺跡周辺の兄川と弟川の二河川によって形成された扇状地には，扇頂部の大工北遺跡，大工南遺跡，扇央部の市川西遺跡，江曽原遺跡，扇端部の市川東遺跡など縄文，古墳，平安時代の遺跡が存在する。

試掘調査の結果，地表下40～50cm程の深さに礫層が認められているが，遺構，遺物の発見はない。

藤 垈 遺 跡

所 在 地　東八代郡境川村藤垈
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和58年11月17日
担 当 者　坂本美夫，米田明訓
面　　積　1,740㎡



藤垈遺跡位置図　(1/25,000)

甲府盆地南側の芋沢川によって形成された小扇状地上の扇央部に位置し，標高380ｍを測る。芋沢川は，御坂山系に水源をもち，本遺跡西側に深い谷を形成しながら甲府盆地へと流出し，笛吹川と合流する。本遺跡周辺には縄文時代の遺跡や古墳時代に須恵器の生産を行ったと推定される牛居沢窯跡が存在する。

試掘調査は，幅１ｍのトレンチを５本設定し遺構確認を行ったが，発見されなかった。

八ケ岳東南麓遺跡分布調査（第１次）

対象地域　北巨摩郡高根町清里「丘の公園」地内，「清里の森」地内
事 業 名　八ケ岳東南麓遺跡分布調査
調査期間　昭和年58年10月６日～11月15日
担 当 者　坂本美夫，保坂康夫
面　　積　1,350,000㎡

八ケ岳東南麓の清里地域には広大な県有林があるが，こうした県有資産を効率的に利用すべく，広域な開発計画が立案された。県企業局による，ゴルフ場やテニスコートなどの総合スポーツ・レクリェーション施設「丘の公園」の建設と，県林務部による，テニスコートなどのレクリェーション施設を有する別荘分譲地「清里の森」の造成事業がそれである。両事業は，昭和58年度から数年度にわたって実施されるもので，丘の公園地域が131ha，清里の森地域が200haにおよぶ大規模開発である。

ところで，両開発地のある地域は，念場ケ原という広大で平坦な台地上である。標高1,000ｍ～1,300ｍほどの高冷地であるが，戦後の入植・開墾の中で，地元の研究者が縄文時代早期から中・近世に至る土器や石器などを採集しており，いくつかの遺跡の存在が知られていた。また，先土器時代遺跡の大密集地として名高い長野県野辺山とは，3kmほどの距離をおいて隣接しており，地形的にも標高も近似することから，同時代の遺跡の存在も期待されていた。

丘の公園，清里の森両地域は，森林で遺物の表面採集は不可能であるため，試掘坑による遺跡の確認調査を行うこととした。遺跡分布調査は文化財保存事業として文化庁の補助を受け，昭和58年度から60年度まで三次にわたって行うこととした。本調査で確認された遺跡は，県企業局，県林務部と県教育委員会とで協議し，範囲確認調査を行ったうえで，必要な保存対策が実施されることとなった。

第１次調査では，丘の公園地域で850,000㎡の範囲に，296ケ所の試掘坑を設定し調査した。試掘坑は，1.5ｍ×1.5ｍの大きさで，ローム層を30cmほど掘り込む深さまで行った。遺跡の立地しそうな台地部分を中心に，25ｍ間隔で設定した。その結果，先土器時代の剥片を出土した地点１カ所，縄文時代らしい剥片を出土した地点1カ所，非常に新しい時期の集石１カ所を確認した。

清里の森地域では，500,000㎡の範囲に，122ケ所の試掘坑を設定した。主に，道路部分を調査対象とし，20ｍ間隔で設定した。本地域は，広範囲に巨礫の原野が存在し，試掘坑の設定さえできない地域もあった。一般的に，丘の公園地域のようなローム層のみの台地は少なく，礫を多く含むローム層ないしは礫層がみられた。また，丘の公園地域と違い，小河川が無数にみられ，こうした河川の堆積作用、削剥作用がかなり進んでいることが窺えた。調査の結果，ローム層が削り残された高地から陥し穴２基を確認した。また，非常に新しい炭焼窯１基を確認した。

史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳（第１次調査）

所 在 地　東八代郡中道町下曽根
事 業 名　史址整備事業
調査期間　昭和58年12月16日～昭和59年２月21日
担 当 者　坂本美夫

史址保存修理事業に先立ち，今年度から墳丘と周溝の形態を明らかにすることを目的として，発掘調査に着手した。この事業は３箇年計画で，初年度は丸山塚古墳と銚子塚古墳の墳丘と周溝の残存状況を把握し，史址境界杭の設置及び航空測量図作成とした。２年度は丸山塚古墳の石室の位置と形態を，３年次は銚子塚古墳の墳丘構造と石室の位置を明らかにすることを課題とした。

その調査を行うにあたり、風土記の丘整備委員会の委員の方々と斎藤忠大正大学名誉教授・大塚初重明治大学教授・岩崎卓也筑波大学教授・本村豪章東京国立博物館原史室長からご指導を受けた。

今年度の調査は次年度からの本格的調査に向けての予備的調査であり、墳丘の遺存状況などの把握に務めた。トレンチを銚子塚に３本（２～４Ｔ）、丸山塚に４本、計７本を設定して実施した。

その結果、西墳とも墳丘の削平が相当進んでいる状況であり、特に銚子塚古墳の前方部分（２～３Ｔ）、では墳端付近に開墾の際にまとめられた部厚い礫層を含んで、厚さ２ｍほどに渡る土砂の堆積層が確認され、大きな削平を受けていることが窺われた。

一方、範囲の確認については銚子塚古墳の２、３号トレンチ、丸山塚古墳の１、２号トレンチにおいて、周溝の外側部分の立上りと考えられる土層の変化が検出された。

埴輪などの出土が見られたが、細片のものが多い状況であった。

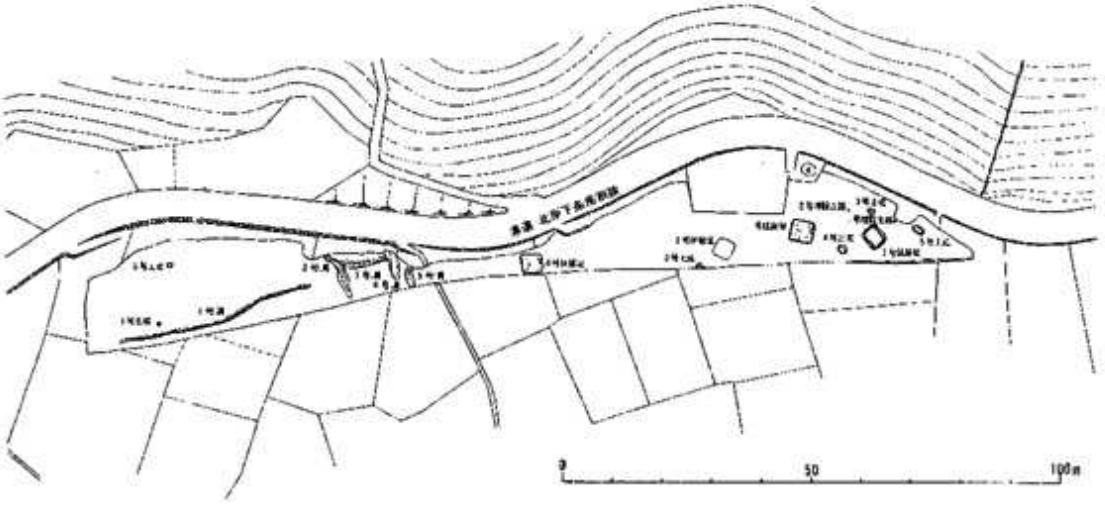
史跡銚子・丸山全体図

久保屋敷遺跡

所 在 地　菊崎市旭町北下条
事 業 名　県道拡幅工事
調査期間　昭和58年8月8日～10月15日
担 当 者　米田明訓，保坂康夫
面　　積　2,300㎡

本遺址の位置する釜無川右岸の竜岡台地周辺には，縄文時代早期から中世にかけての遺址が多く分布している。中でも古代末から中世末までは甘利荘として栄えた地域でもある。しかし，発掘調査が行われたのが今回初めてである。

調査によって住居址が4軒，溝が6本，土壙が6基，逆位の埋甕が2個などが検出された。住居址は古墳時代前期に位置づけられるもので，何れも南北に長い方形である。3号住居址は，4隅に柱穴がある。5号土壙は，中央に焼土がみられる長方形の土壙で縄文時代中期である。溝は，1号溝が古墳時代であるほかは時期が不明である。4号溝の中には長さ3m余りの石列がみられる。この石列を構成しているのは，ほとんどが五輪塔及び宝篋印塔である。縄文時代の遺構は土壙以外検出されなかったが，遺物は中期のものが多く出土した。



久保屋敷遺跡全体図

59年度概要

① 59年度事業概要

今年度当埋蔵文化財センターの発掘調査事業は，飯田１丁目遺跡・丘の公園14番ホール遺跡・柳坪遺跡・史跡丸山塚古墳・八ヶ岳東南麓遺跡分布調査・上野原遺跡・村上遺跡・浜井場遺跡・後呂遺跡の９件を行った。整理作業事業は，飯田１丁目遺跡・丘の公園14番ホール遺跡・柳坪遺跡・八ヶ岳東南麓遺跡分布調査・金の尾遺跡・釈迦堂遺跡・北堀遺跡・二之宮遺跡・姥塚遺跡・四ツ塚遺跡・上野原遺跡・一の沢西遺跡の12件であった。報告書を刊行した遺跡は，昭和57年に農林水産省の笛吹川沿岸畑地灌漑用水管埋設工事に伴って調査した妻神遺跡（平安時代）・真福寺遺跡（縄文時代）・58年度に調査した手古松遺跡（古墳時代後期）・市川北遺跡（縄文時代）・勝沼氏館跡（中世）・藤垈遺跡，丘の公園14番ホール遺跡（旧石器時代），北堀遺跡（平安時代）・四ツ塚遺跡の９件である。

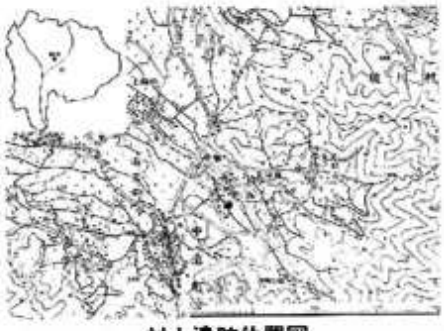
丘の公園14番ホール遺跡は，前年に八ヶ岳東南麓遺跡分布調査で確認された遺跡であるが，今年度の範囲確認調査によってゴルフコース内に遺跡が一部かかることが明らかになった。そのため若干の計画変更が行なわれた。史跡整備に先立って調査された史跡丸山塚古墳の墳頂にある石室側壁から，ベンガラによる円文が発見され話題を呼んだ。公立学校共済組合甲府宿泊所建設に先立つ飯田１丁目遺跡からは弥生時代から古墳時代にかけての遺物が出土した。上野原遺跡では，甲府盆地周辺では初めてＡＴ層が微量ながら検出された。中央自動車道長坂インターチェンジ建設に先立って調査された柳坪遺跡では平安時代の木製品が多量に出土した。また「名田」と墨書された坏が出土した。

② 各地の概要

高根町教育委員会が調査した東久保遺跡からは，中世の土壙群と共に掘立柱建物址が複数検出された。小淵沢町教育委員会で調査した前田遺跡からは，平安時代の竪穴住居址・掘立柱建物址と共に土師器窯址が２基が検出された。これは昭和57年度に須玉町教育委員会が調査した，大小久保遺跡で検出された窯と共に土師器の編年を組み立てる上で重要な意味を持つものである。長坂町教育委員会で調査した小和田館跡は，15世紀を中心とする集落で，これは県内では初めて検出されたものである。また古瀬戸灰釉四耳壺などに入った古銭が約6,000枚出土した。さらに古瀬戸鉄釉鳥形水滴，和鏡２面などが出土している。韮崎市教育委員会が調査した中田小学校遺跡では，奈良時代から平安時代にかけての集落が検出された。「葛井」と墨書された坏が発見された。これによって現在の「藤井」という地名が，従来言われてきたような中世地名ではなく，少なくも平安時代にさかのぼることが明らかになった。またこの遺跡から出土した遺物から北巨摩地域の土師器の編年が大きく前進することになった。境川村教育委員会はゴルフ場建設に先立ち６遺跡の調査を開始した。

村上遺跡

所在地	東八代郡中道町中畑
事業名	笛吹川農業水利事業
調査期間	昭和59年10月1日～12月27日
担当者	中山誠二
面　積	400 ㎡



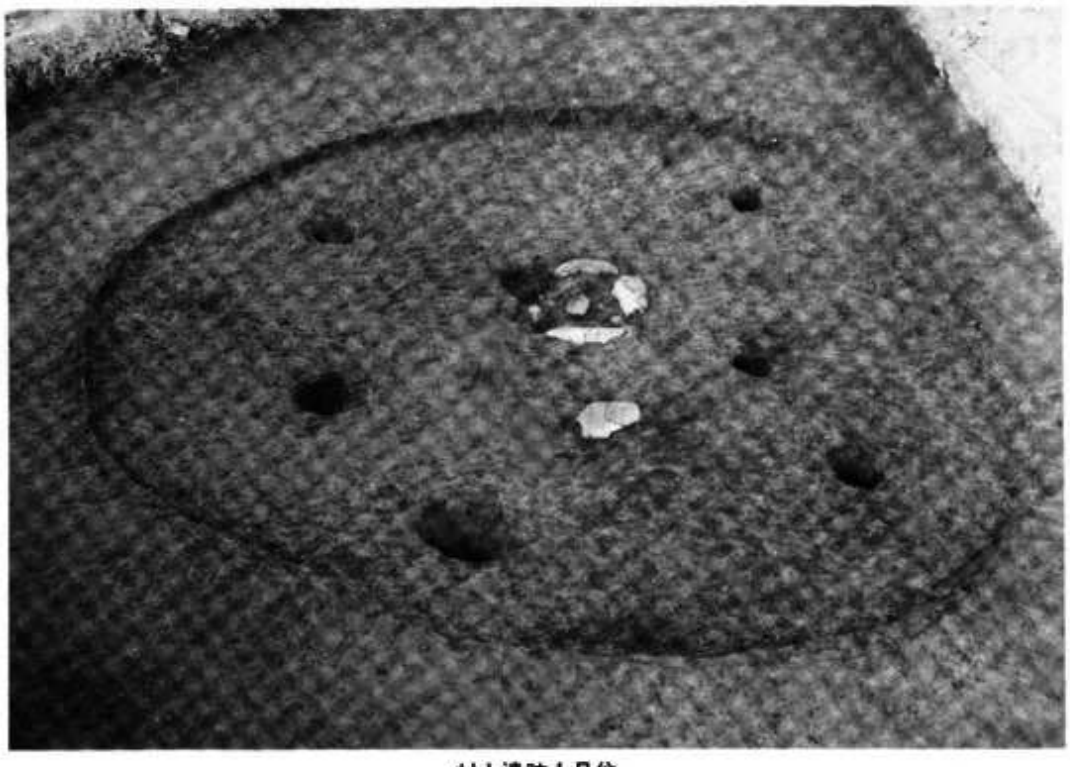
村上遺跡位置図

村上遺址は，甲府盆地南縁に帯状にのびる曽根丘陵上の中でも最上部に位置し，標高360m前後を測る。遺址の東側を滝戸川，西側を西川が笛吹川へ向けて北流し，両河川によって形成された扇状地上に遺址がのる。西川の対岸には上野原遺跡，城越遺跡など縄文時代前期から後期を中心とした集落址などが認められている。

本遺址は，1976年東八代横断広域農道建設に伴って県教育委員会により発掘調査された経緯をもち，縄文時代，平安時代の集落址の存在が確認されている。

今回の調査で発見された遺構は，縄文時代中期中葉（井戸尻式期）の集石遺構1基と住居址1軒である。住居址は，南北4m80cm，東西4m70cmの卵形を呈し，壁高は15cm程度である。炉は石囲いで住居址中央よりやや北に扁して存在する。

付近の分布調査では，扇状地上の南北200m，東西150mほどの範囲で縄文時代の土器片が多く採集されているが，今回発見された住居址は，土器散布地域の中でも北側に位置している。

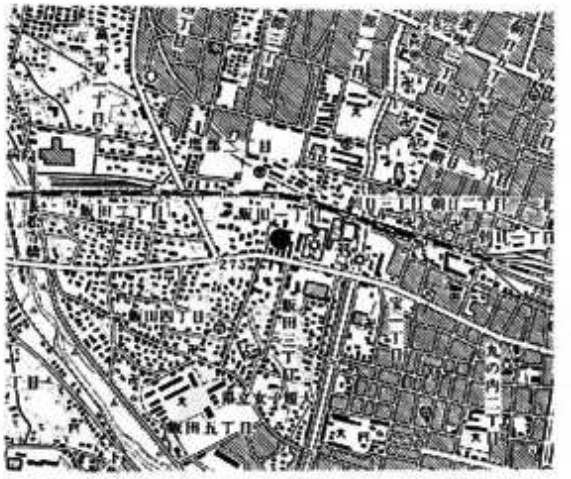


村上遺跡1号住

飯田一丁目遺跡

所 在 地　甲府市飯田一丁目２番
事 業 名　公立学校共済組合山梨宿泊所建設事業
調査期間　昭和59年４月13日～５月４日
担 当 者　新津　健，米田明訓，保坂康夫
面　　積　300㎡

本遺跡は，昭和51年にボーリング場建設中に発見された。すでに，塩部遺跡として遺跡の存在が周知されていたが，直径800ｍもの広大な地域が遺跡としてくくられており，この一帯の原地形も宅地化によって不明瞭なため，正確な遺跡数や範囲をつかむに至っていない。そこで，本調査では，塩部遺跡の一部ではあるが，その中の一発掘地点という意味合いで，町名にちなんで遺跡名を付した。



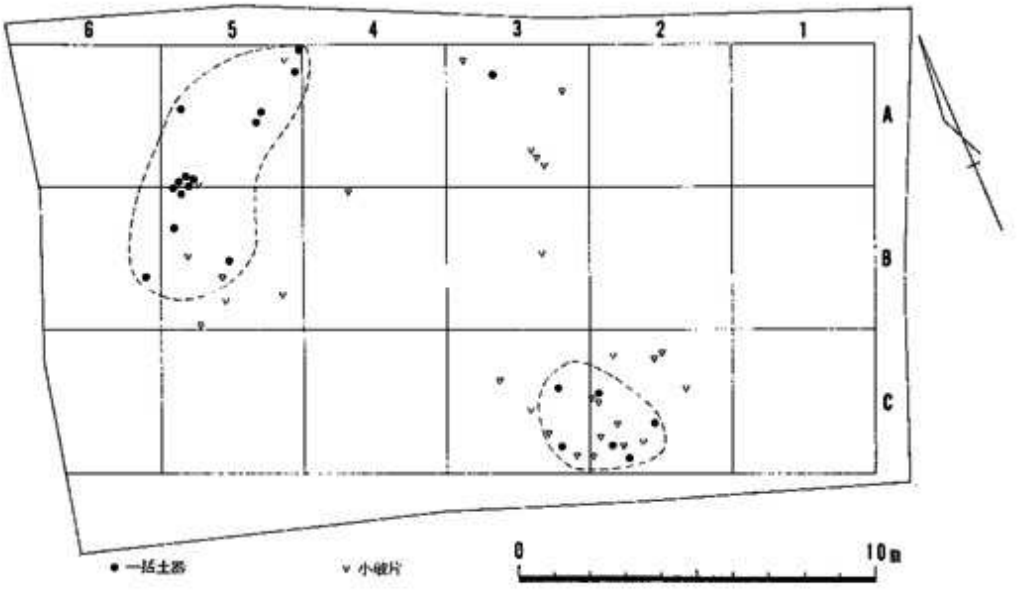
飯田一丁目遺跡位置図

調査は，盛り土および表土を重機により排除した後，発掘区内に４ｍ方眼のグリッドを設定し，遺物の出土地点を記録しながら順次掘り下げる方法で行った。その結果，古墳時代の土師器を中心に，縄文時代や弥生時代の遺物が出土した。遺構については明瞭なものが確認できなかったが，同一レベルに拡がる土器群を検出しており，この部分に住居等の遺構が存在した可能性がある。

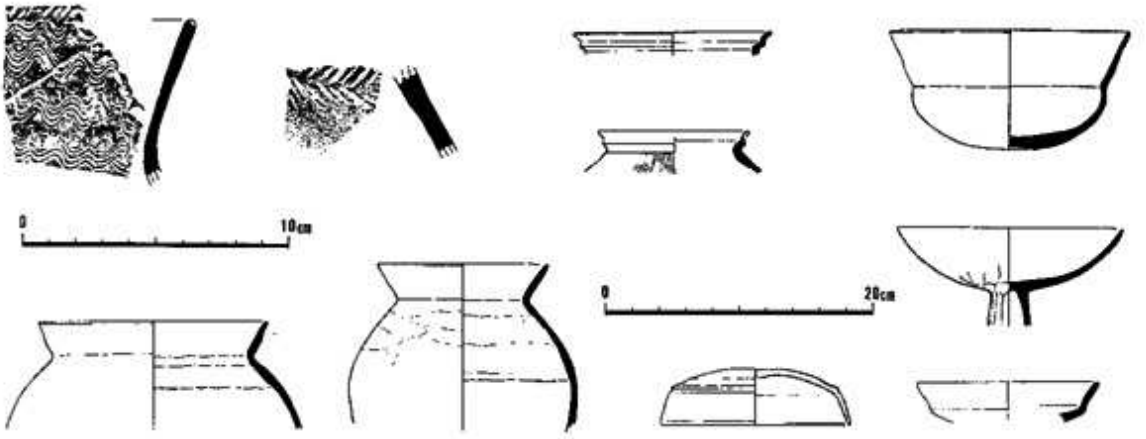
本遺跡の土層は，地表下２～2.5ｍの最下部に青灰色粘土層があり，その直上に厚さ50cmほどの黒褐色粘質土層がある。後者に遺物が包含されていた。その上位には砂層と粘土層がみられる。地下水面が遺物包含層下半部にあり，調査に困難をきたした。

こうした土層からも，本地域が河川の運搬物の堆積環境にあることが窺えるが，周辺地域の地形をみても窺い知ることができる。本遺跡は相川扇状地の南西端部にあるが、相川と荒川の大河川の合流点に近く、出水時のダムアップにより冠水しただろうことが容易に想像できる。実際、本地域は、相川扇状地と荒川の扇状地に挟まれた比較的平坦な地形であり、両扇状地間をダムアップによる逆流水が堆積させた土層によって埋積されているだろうと想像できる。遺跡は、扇状地上というより、この平坦地上に立地している。河川の影響を強く受けたにもかかわらず，遺跡が立地していた条件を考える必要があろう。

出土遺物は，縄文時代の土器，石鏃，スリ石，櫛描波状文を有する甕形土器や，綾杉状の疑似縄文を有する壺形土器などの弥生時代の土器，Ｓ字状口縁台付甕や球胴の壺形土器，埴形土器，高坏形土器などの古墳時代前期の土器，坏形土器や高坏形土器，須恵器の蓋坏の蓋などの



調査区遺物出土状況



飯田一丁目遺跡出土土器

古墳時代後期の土器が得られた。

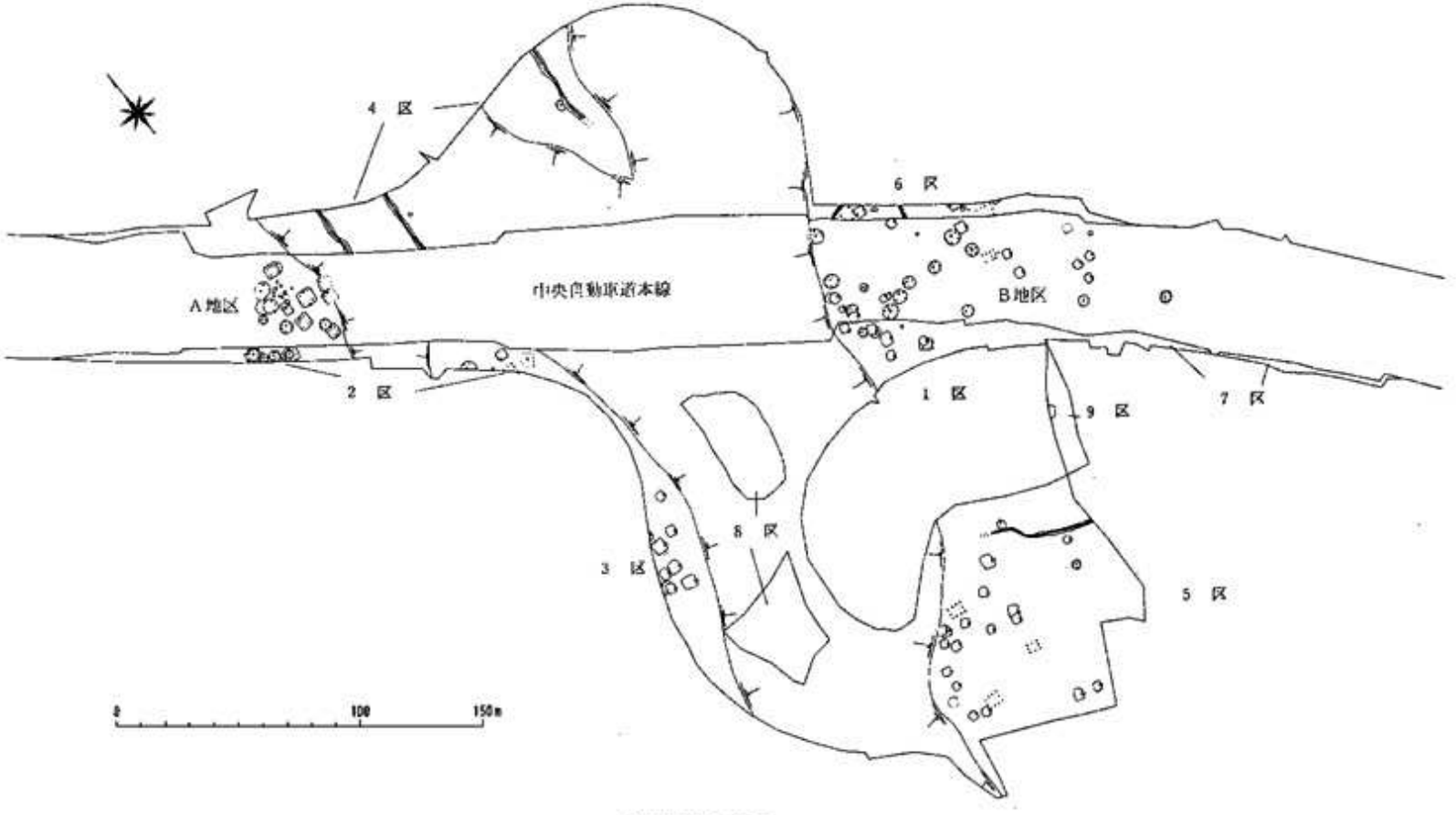
本遺跡は，湯村・千塚の後期古墳群集地に近く，そうした古墳群にかかわる集落址の存在を考えることができる。遺構が発見できなかったものの，今後この周辺に集落址が発見されることは確実である。

柳坪遺跡

所在地	北巨摩郡長坂町大八田字秋田
事業名	中央自動車道長坂インターチェンジ建設事業
調査期間	昭和59年6月11日～同年12月20日
担当者	新津健，米田明訓
調査面積	26,000㎡

本遺跡は八ヶ岳南麓を流れる鳥川左岸の標高 700ｍに位置する。この地域は中世には大八田庄と呼ばれた。小淵沢町の北野天神社所蔵応永19年9月25日銘の鰐口にその名がみえる。また建武4年3月7日の足利直義安堵ド文ゲに「上大八田村・下大八田村」が逸見庄内の村名としてみえる。この遺跡は中央道の本線工事に先立つ昭和48年に西側部分が調査されている。今回のインター建設に伴う調査は，本遺跡の東と南側を中心に行なわれた。今回の調査では中央にある沢を挟んで東西に住居址が分布していることが，明らかになった。検出された遺構は，縄文時代中期と平安時代の住居址が合わせて52軒，掘立柱建物址6棟，土壙14基，溝6本である。住居址の内訳は、縄文時代の住居址はふたつの群からなっており合わせて8軒を数える。弥生時代の住居址は2軒，古墳時代の住居址は1軒，平安時代の住居址は36軒，その他時期不明のものが4軒であった。掘立柱建物址の内訳は2間3間が5棟である。溝はすべて平安時代以降のものである。土壙の内訳は縄文時代から5基，平安時代が1基，時期不明が8基である。

7号住居址は弥生時代後期のもので土製紡錘車が出土している。8号住居址は古墳時代後期のものである。11号住居址は縄文時代中期後半に位置付けられ、多量の土器とともに土偶が1点出土している。19号住居址から「名田」と墨書された内黒土器が出土している。21号住居址からは石製の革帯が1点，「地」・「他」・「山」と墨書された箆削りが施されている坏が出土している。24号住居址からは底に「西」と墨書された坏，26号住居址からは「月」と墨書された坏が出土している。12世紀に位置付けられる25号住居址からは鉄製の紡錘車が出土している。29号住居址からは「木」・「長」・「18」（人）と墨書されている坏が出土している「長」は内黒土器，「木」と「18」には暗文がある。33号住居址からは「19」と墨書された坏が出土している。38号住居址からは「三」と墨書された坏が出土している。49号住居址からは「壙」・「保」と墨書された内黒土器が出土している。43号住居址からは「巾」と墨書された内面に暗文をもつ坏が出土している。50号住居址からは鉄鏃が1点出土している。また遺跡の中央を流れる沢からは平安時代のものと考えられる木製品が多数出土した。その他中世や近世の遺物が出土している。



柳坪遺跡全体図

八ケ岳東南麓遺跡分布調査（第２次）

対象地域　北巨摩郡高根町清里「丘の公園」地内、「清里の森」地内
事業名　八ケ岳東南麓遺跡分布調査
調査期間　昭和59年９月25日～11月１日
担当者　保坂康夫
面　積　1,400,000㎡

本調査は，八ケ岳東南麓，清里地域の大規模開発事業地域における文化庁の国庫補助による遺跡確認調査である。この事業の一つは，県企業局による総合スポーツ・レクリエーション施設「丘の公園」地内，もう一つは，県林務部による別荘分譲地「清里の森」地内である。

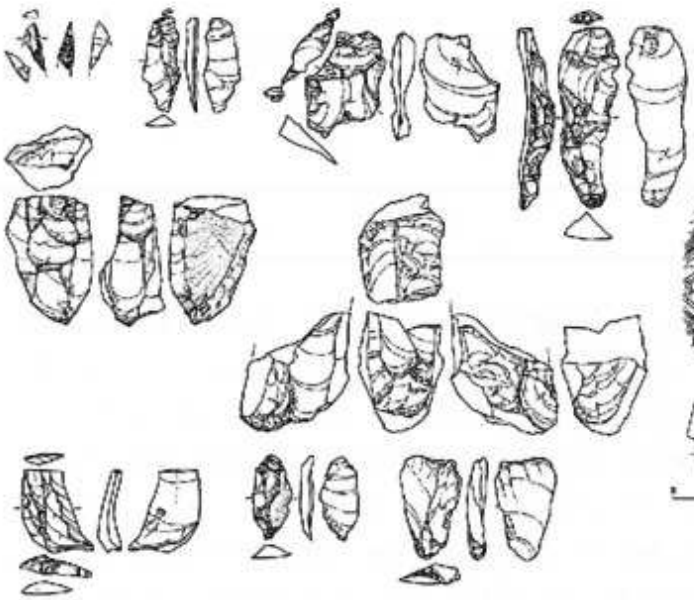
丘の公園地域では，500,000㎡の範囲に 218ヶ所の試掘抗を25ｍ間隔に設定し調査した。試掘抗は，1.5ｍ×1.5ｍ の大きさで，ローム層を30cmほど掘り込む深さで行った。

本地域の土層は，基本的には黒色土層とローム層である。黒色土層は漆黒色で軟質の上部と、やや褐色がかって硬質の下部とに分かれる。ローム層は，ソフトローム層とその下位のハードローム層とに分かれる。また，部分的に，黒色土層上位に暗褐色で極端に軟質の土層が乗る。この土層は，川俣川崖線にそった幅 300ｍほどの地域に特に多く，台地の西側肩部で，上手状の高まりとなって連続する。また，下位の黒色土層との境界が直線的で，撹乱の跡がない。非常に厚い部分は，２～３ｍもの高さに堆積するが，層相が上下で変化がみられない。ただし，丘の公園地域の北部では，黒色部分と褐色部分とで互層し，非常に硬質となっている。以上の状況から，黒色土層上位に急激に堆積した風成堆積土層であろうと推定した。時期も非常に新しいものと思われる。

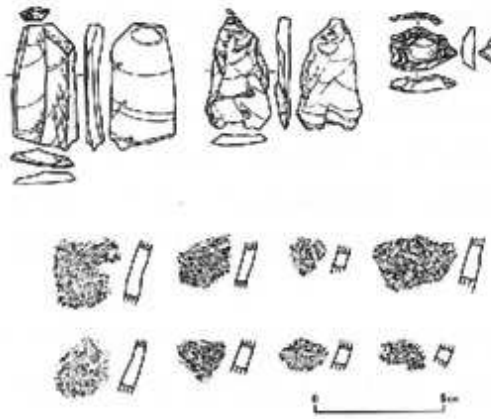
本地域の地形は、ローム層の平坦面が，河川の開析によって帯状に分断されたもので，削り残されたローム層の台地と，削られた低平地とからなる。低平地には，礫を多く含むローム層や礫層がみられるが，こうした地域は，本地域の東側に多い。

遺物・遺構が発見されたのは，ローム層の台地上である。先土器時代のナイフ形石器や剥片，石核が４カ所から，縄文時代の土器や石器が３カ所から，縄文時代の陥し穴が５カ所から発見された。その他，縄文時代と思われる木炭層が１カ所，焼土が１カ所，時期不明の塚やマウンドが３カ所，時期不明の溝が１本確認できた。丘の公園地域の分布調査は，今年度で終了するが，遺構や遺物の出土地点は，本地域の北部に集中していることが判明した。

清里の森地域は，700,000㎡の範囲に 115ヶ所の試掘抗を設定し調査した。道路の建設予定地に50ｍ間隔で設定した。本地域は，丘の公園地域でみられた低平地が広範囲にある状況である。礫混りのローム層や礫層が一般的にみられ，河川の開析により削り残されたローム層台地はほとんどない。無数の中小河川がみられ，湿地状を呈する地域もある。しかし，泥炭はみられず，湿乾を激しくくりかえす地域であると思われる。遺物や遺構は，まったく確認できなかった。



丘の公園地域試掘坑配置図



丘の公園地域出土遺物

清里の森地域試掘坑配置図

丘の公園14番ホール遺跡

所 在 地　北巨摩郡高根町清里
事 業 名　「丘の公園」建設事業
調査期間　昭和59年5月9日～6月19日
担 当 者　保坂康夫
面　　積　1,600㎡

本遺跡は，県企業局が開発を進めている総合スポーツ・レクリエーション施設「丘の公園」内に所在する。昭和58年度に実施した，文化庁の国庫補助による八ヶ岳東南麓遺跡分布調査で

発見された。今回の調査は，県企業局の委託により，遺跡の範囲確認調査を行い，開発と文化財保護との調整をはかろうとするものである。調査の結果，遺跡の一部が造成予定のゴルフコースにかかることが判明した。この結果をふまえ，県教育委員会と県企業局とで協議し，ゴルフコースを設計変更し，遺跡を保存することを決定した。当地には，県企業局により遺跡名を記した標式が設定されている。なお，本地域は小字名がないため，遺跡名を造成されたゴルフコースにちなみ，「丘の公園14番ホール」遺跡とした。

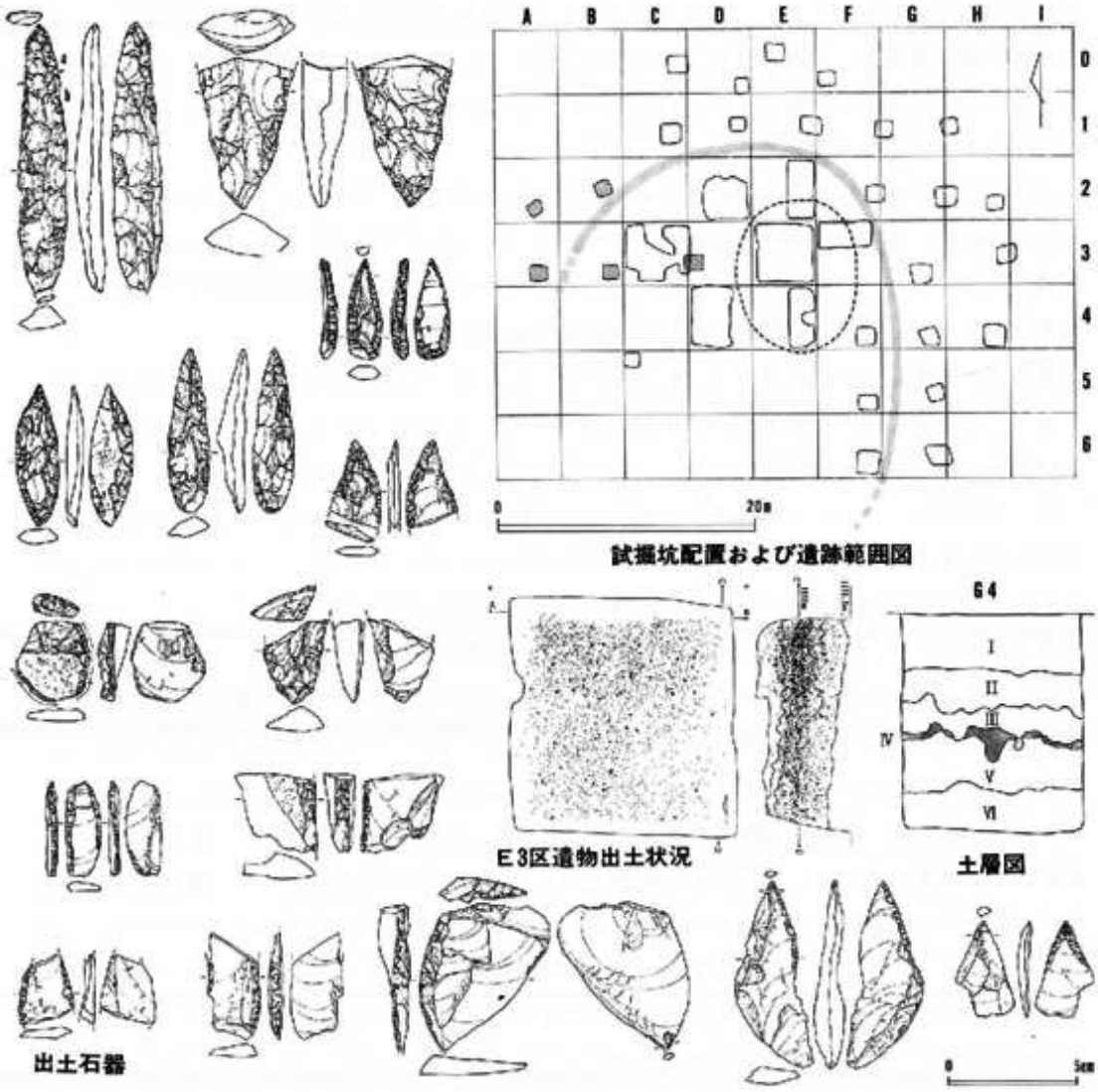
調査は，遺跡範囲確認調査という性格上，試掘抗を広範囲に設定する方法で行った。45m×35mの範囲に，5m方眼のグリッドを設定し，1グリッドに1カ所ずつ，1.5m×1.5m の試掘抗を設定し掘り下げた。また，遺跡の年代や性格を知るため，部分的に試掘抗を拡張した。調査の結果，遺跡は直径約30mの範囲であることを確認した。

遺物は，土器をまったく含まず，石器や剥片，木炭片である。当地の土層は，Ⅰ層が急激に形成された風成堆積土の暗褐色砂質土層，Ⅱ層が黒色土上部の漆黒色土層，Ⅲ層が黒色土下部の黒褐色土層，Ⅳ層が黒色土からローム への漸移層である暗褐色粘質土層，Ⅴ層がソフトローム層，Ⅵ層がハードローム層である。遺物は，Ⅳ層からⅤ層上部を中心に，Ⅱ層上面からⅤ層中部あたりまで分布していた。本地域は，人為的な攪乱がまったくなく，またⅠ層によりある時期から包含層が保護されていたため，遺物の遺存状況が非常に良好である。また，先述した遺跡分布調査では，Ⅲ層上部で縄文時代早期末の土器群を確認している。

遺跡の立地をみると，南北方向に細長く続く，幅 100mほどの台地の西側肩部にある。台地は，河川の開析によりローム層が削られてできたものである。台地の東西には，台地に沿って低地が続くが，泥炭がみられるような場所はない。遺跡の標高は，1150mである。

出土した遺物は，槍先形尖頭器，削器，石錐，石核，剥片，木炭片である。槍先形尖頭器は，木葉形や柳葉形のもので，両面とも全面加工のもの，片面のみ全面加工で，片面が周辺加工のもの，両面とも周辺加工のものの三者がみられる。大きさも，長さ10.5cmの大型品から，2.3cmの小型品までみられる。削器は素材の片面のみに加工のみられるもので，素材の両縁に加工がみられるもの，片縁のみのものがある。刃部も凸刃と直刃とがある。石錐は，三角形状の剥片素材の鋭角の一端を加工して先端を作り出したもので，片面のみに加工がみられるものと，両面に錯行的な加工を行うものとがある。石核は，円盤形のものと角柱形のものとがある。円盤形は，一面に自然面を大きく残し，その周縁に急角度の剥離を行って打面としている。剥片剥離作業は求心的に行われ，比較的縦長の剥片が取られている。角柱形は，縦横からの大きな剥離がみられ，大きな母材を分割したような状況である。あるいは，これそのものが石器の素材となった可能性も考えられる。石器の出土点数は，上記の順で少ない。

石器の石材は，黒曜石とシルト岩で，槍先形尖頭器では黒曜石が多く，削器や石錐ではシルト岩が多いようである。


A B C D E F G H I
0 1 2 3 4 5 6
0 20m
試掘坑配置および遺跡範囲図
E3区遺物出土状況
G4
I
II
III
IV
V
VI
土層図
出土石器
0 5cm

後呂遺跡

所 在 地　東八代郡中道町右左口字郷戸，後呂
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和59年10月1日～12月27日
担 当 者　中山誠二
面　　積　800㎡

後呂遺跡は，村上遺跡の西方1kmの曽根丘陵上に位置し，標高 320m前後を測る。遺跡周辺は，西側に七覚西川，北側に宮沢川，南側に七覚川が開析するため東西に長い台地をなし，その東端部に発掘調査対象地域が存在する。

発見された遺構は，縄文時代中期の住居址3軒，土壙10基，配石遺構1基，埋甕3基，古墳時代初頭の住居址1軒，溝状遺構3本，時期不明の竪穴状遺構1基である。

縄文時代の遺構の中で住居址は，2軒が中期中葉の井戸尻期，1軒が中期後葉の曽利期に比定される。調査区域と攪乱などによって完全なプランで確認されたものはないが，いずれも石囲い炉及び柱穴の一部が検出されている。埋甕は3基共に屋外に埋設されたもので，2基は併設されていた。埋設土器から中期後葉の曽利Ⅲ～Ⅳ期のものと判断される。

古墳時代初頭の住居址は，大半がすでに削平され，床面の一部のみが辛うじて残存していた。該期の溝状遺構は，調査範囲の関係で全体的なプランが明らかではないが，古墳の周溝乃至方形周溝墓の一部とも考えられる。

浜井場遺跡

所 在 地　東八代郡豊富村関原字浜井場
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和59年12月1日～5日
担 当 者　中山誠二
面　　積　50㎡

浜井場遺跡は，後呂遺跡の西方 1.5km程の曽根丘陵上最上部に位置し，標高 300mを測る。付近は御坂山塊と曽根丘陵との接点にあたり東側を舟井川，西側を浅利川が流れる。

本遺跡は，埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば，縄文時代中期の土器が散布することが記されているが，今回の調査区はその散布地の北側に位置するため遺構は検出されなかった。出土土器は1点で，弥生時代中期初頭の条痕文土器である。

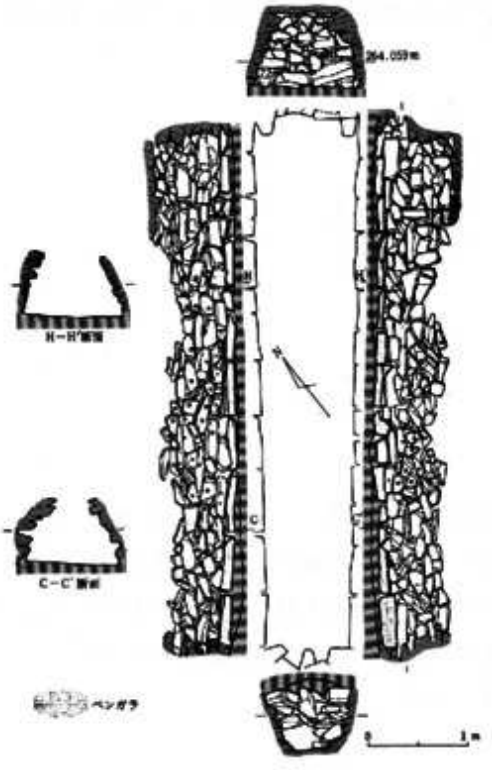
史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳（第２次）

所 在 地　東八代郡中道町下曽根
事 業 名　公園整備
調査期間　昭和59年６月11日～12月22日
担 当 者　坂本美夫

墳形は昭和56年に地形測量などの結果から，北側に張り出し部分を持つ帆立貝式前方後円墳の可能性が指摘されていた。調査の結果、同所は墳丘が削られその土砂が１ｍ以上に堆積したものと確認され，従来通り円墳と結論された。規模は墳丘と周溝底とが接する変換点を墳端とすれば直径72ｍほどを推定できる。

墳丘の築成は，現況の段を形成する付近で僅かな平坦面が検出され，これを築成面とすれば２段築成となろう。なお葺石はその痕跡を全く確認できず，かつ墳端部トレンチ内の礫の堆積も多くなく，葺石の存在は消極的といえる。

周溝底は南から北に向って低くなり，現地面から北側で１ｍ前後，南側で２ｍ前後で底となる。周溝の幅は北東側で15ｍ，南西部で24ｍと南側がやや広い状況であった。なお周溝の差し渡し距離は南北 111ｍ，東西 107ｍほどを測る。



丸山塚古墳石室展開図

竪穴式石室が墳頂やや西寄りに，主軸方向をＮ—38°—Ｅに向けて存在した。規模は底面で長さ5.55ｍ，幅が北壁側で1.05ｍ，南壁側で0.85ｍを測る矩形を呈する。床は南北方向がほぼ水平，東西方向がやや湾曲し，赤色顔料（酸化第２鉄）が塗布されていた。東・西側壁の中央付近に直径３～４cmの赤色顔料による円文が，東壁11個，西壁32個の合計43個確認された。

円筒埴輪，器財埴輪，鉄製品（鏃），陶磁器片など。

上野原遺跡

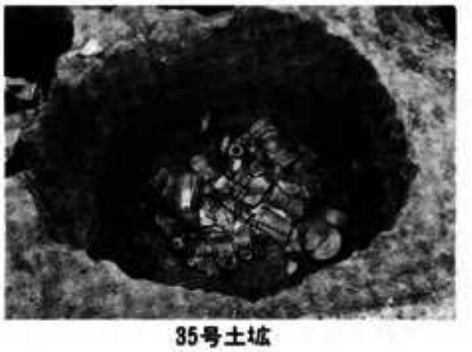
所 在 地　東八代郡中道町右左口字上野原
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和59年10月1日～12月15日
担 当 者　中山誠二
面　　積　1,800㎡

上野原遺跡は，甲府盆地南縁の曽根丘陵の中でも最上部に位置し，標高 350m前後を測る。遺跡の南側には御坂山塊に連なる日蔭山，滝戸山などが迫り東方に西川，西方に七覚川が甲府盆地にむけて北流している。このため付近は御坂山塊から北西方向になだらかに傾斜する北斜面となるが，日照条件に恵まれた台地状地形の上に遺跡は存在する。本遺跡は1971年に有料道路甲府・精進湖線建設工事に伴っての発掘調査で，縄文時代の集落址の一部が確認されている。

今回の調査で発見された遺構は，縄文時代前期末～中期の住居址16軒，土壙95基，単独埋甕5基，集石遺構1基，配石遺構1基，竪穴状遺構2基，時期不明の溝状遺構4本である。住居址の分布状況から東西約 180m，南北約 150m程の規模の集落であったと推定される。集落形態は，住居址が環状または馬蹄形に巡るものと考えられ，住居址東端の更に東側に土壙，単独埋甕等の墓域と推定される空間が存在する可能性が高い。

住居址の分布状況は，縄文時代前期末段階では極めて散在的であるが，中期になると一定区域に集中する傾向を示し，ある程度継続的な集落が営まれたものと推定される。住居址以外の遺構としては，土壙が縄文時代中期中葉の藤内期以降急増する他，井戸尻期以降には単独埋甕の埋設が顕著となる。土壙の形態は平面形態が楕円形を呈するものが全体の45%を占め，つぎに円形プランが続く。断面形態は皿状または円筒形を呈するものが大半を占め，袋状やフラスコ状を示すものは認められない。土壙内の遺物出土状態は，土器片を数点覆土中に混入するものが最も多いが，完形深鉢を逆位に埋設する例（18号土壙）や土壙底部に完形土器を横たえて埋設する例（35号土壙）など極めて特異な出土状況を示すものも存在する。

5号・7号～9号住居址


35号土壙

60年度の概要

① 60年度事業概要

今年度当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した遺跡は，風土記の丘公園地内にあるかんかん塚（茶塚）と坏塚及び上の平遺跡さらに史跡銚子塚附丸山塚古墳・駒井遺跡・県指定史跡於曽屋敷・智光寺遺跡・切附遺跡・弥次郎遺跡・横畑遺跡である。駒井遺跡は県道の拡幅工事に先立って行ったもので，平安時代前半の遺構が検出されたが，これは昨年度調査された中山小学校南遺跡とともに北巨摩郡では貴重な資料を提供した。於曽屋敷は警察署官舎建設に先立ち調査したが，新たな土橋と門址，さらに外側の土塁が検出された。これによって建設計画は大きく変更され，遺構は保存されることとなった。54年度から調査されている上の平遺跡では，方形周溝墓群の南から弥生時代の竪穴住居址と掘立柱建物址が検出された。かんかん塚等の調査で、坏塚は中世に築かれた可能性が指摘される。智光寺遺跡以下は笛吹川農業水利事業に伴う調査であるが，横畑遺跡からは，中世後半の土壙群が検出された。史跡銚子塚古墳の調査では，壺形埴輪が出土した。これは，東日本でも古い時期に位置付けられるもので，この古墳が築かれた年代を明らかにする上で極めて重要な資料であろう。

整理作業をした遺跡は圃場整備に先立って調査した大泉村の寺所遺跡，中央自動車道建設に先立って調査した釈迦堂遺跡・二之宮遺跡・姥塚遺跡・笠木地蔵遺跡である。報告書を刊行した遺跡は八ヶ岳東南麓分布調査・一の沢西遺跡・史跡銚子塚附丸山塚古墳・柳坪遺跡・釈迦堂遺跡・笠木地蔵遺跡である。

② 各地の概要

一宮町教育委員会で調査した筑前原墨址は，弥生時代の住居址・古墳時代の住居址・平安時代の遺構と共に15世紀を中心として営まれていた館跡が検出された。この館には，深さ2m，幅3m余りの空堀が巡っており，この堀に囲まれた区域には礎石を伴う建物址と柱穴を伴う建物址が検出された。さらに多量の炭化した穀物が焼土と共に広範囲に認められた。高根町教育委員会が調査した石堂遺跡からは，縄文時代後期から晩期の石棺墓群を伴う大配石遺構が検出された。この遺跡は，大泉村の金生遺跡と共に縄文時代後期から晩期にかけての墓制を理解する上で重要なものとして注目されている。昭和町教育委員会で行った義清神社境内の調査は，甲斐源氏の発生にかかわる新しい資料を提供する可能性があり，注目される。武川村教育委員会が調査した宮間田遺跡は，平安時代前半を中心とした大集落であるが，山茶碗や常滑の甕が出土しているので一部中世の遺構が存在している。甲府市史編纂委員会で調査した一の森経塚は，本県で初めて経塚の考古学的調査を実施したもので，出土した遺物と共に本県の中世史を理解する上で極めて重要な調査であった。増穂町教育委員会で調査した権現堂遺跡は，中世の泥塔の窯跡であることが明らかになってきている。これは，中世宗教史を研究する上では注目すべき調査である。この調査は来年度も継続される予定である。

かんかん塚（茶塚）古墳・杯塚

所 在 地　東八代郡中道町下曽根小字岩清水908～917番地
事 業 名　都市公園整備事業
調査期間　昭和60年5月27日～7月24日
担 当 者　坂本美夫

かんかん塚（茶塚）古墳杯塚は，盆地中央を南流する笛吹川左岸に南東方向に連なる曽根丘陵上に位置する。厳密にいうと間門川と滝戸川とによって形成された一支丘が平地と接する傾斜変換線付近に占地する。

本墳の名称については昭和2年以来最近まで，研究者の間で一定していなかった。そこで最も位置を限定していると考えられる『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5号などをもって，かんかん塚古墳とした。昭和52年に調査された「茶塚」古墳の前方部が該当する。

かんかん塚（茶塚）古墳は先に述べたように昭和52年，県教育委員会によって調査されている。この調査において河原石野面積の竪穴式石室が発見され，剣，鉄鏃，挂甲小札などと共に本県最古と見られる馬具類の副葬が確認された。これら副葬品から5世紀後半代に築造されたものと考えられている。

墳形については東方に近接した杯塚を取り込み後円部，本墳を前方部とする全長40mほどの前方後円墳の可能性が推定されていた。

さて今回，整備事業に先立ち明確な規模を確定する必要から，再調査を実施することになった。その結果，墳丘は礫混入黄褐色土と黒褐色土とを交互に叩き締めた版築の方法で作られていることが明確となった。一方、本墳と杯塚との間については版築の状況は全く見られず，墳丘との間に大きな違いが見られた。従って，これらと杯塚との所見から一個の独立した古墳と考えられるべきところとなった。その規模は南北25m，東西20mの楕円形に近い円墳である。

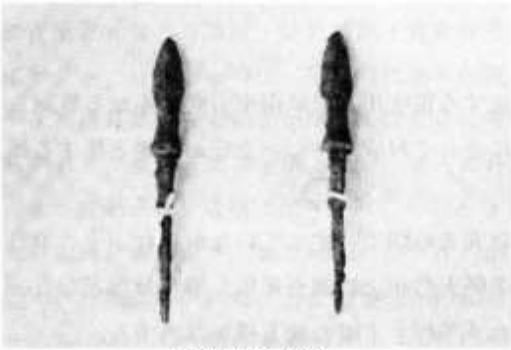
杯塚は昭和52年の調査において，かんかん塚古墳の墳丘に対する後円部として捉えられた。昭和56年に発掘調査が県教育委員会によって実施され，その結果，墳丘中央において主体部の残存らしい状況が見られたようであるが，不明の点が多かった。

今回の調査はこれを受け墳形，規模，主体部の形状・規模の確定を目的とした。その結果，墳丘構築には通常の古墳の構築に見られるような版築の状況が認められず，全て黒褐色系の土をそれほど叩き締めずモッコ状に積み重ねて構築している状況が捉えられた。また墳丘中央の地表下50cmほどのところからは，拳大の礫が1m四方ほどの広さに敷きつめられているのが確認され，その中から，16世紀前後の時代に使用されたと考えられる鉄鏃5本ほどの出土をみた。

墳形は円形ないし隅丸方形と考えられ、規模は周囲に回る溝状の窪地を境にとると，おおよそ15mとなる。従って，これらの結果からは従来考えられていたような古墳ではなく，中世以降の供養塚などが考えられるところとなった。

以上，かんかん塚（茶塚）古墳と杯塚は，杯塚が古墳を再利用した供養塚でなく，当初より

供養塚として構築されたと考えられるところとなり，これまでのように両者を一つの前方後円墳と見なすことは否定されることになった。別々の独立した古墳と中世の供養塚ということになる。



杯塚出土鉄鏃

杯塚礫施設

上の平遺跡（第４次調査）

所 在 地　東八代郡中道町下向山
事 業 名　曽根丘陵公園整備事業及び町道上の平線改良事業
調査期間　昭和60年６月15日～昭年60年12月８日
担 当 者　中山誠二
面　　積　3,000m²

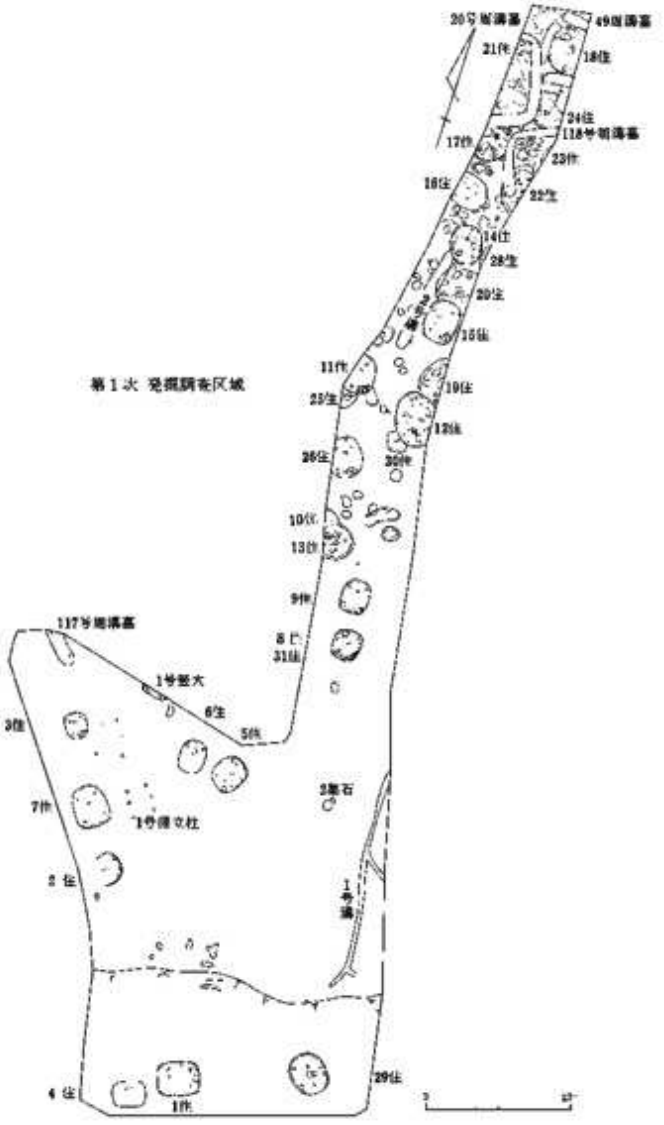
上の平遺跡は，甲府盆地南縁に東西に横たわる曽根丘陵上の一角に位置し，標高330km前後を測る。遺跡をのせる東山は，東部を間門川，西部を滝戸川によって開析され，甲府盆地へ舌状にせり出している。この遺跡は，昭和54年から56年にかけ３次にわたる発掘調査が行われ，弥生時代末葉から古墳時代の初頭にかけての方形周溝墓群が発見され保存されている地区である。

第４次調査の調査地域は，第１次調査で55基の方形周溝墓の確認された地点の南側と東側に位置する。今回の調査で新たに発見された遺構は，縄文時代の住居址14軒，土壙89基，集石２基，竪穴状遺構１基，弥生時代の住居址16軒，方形周溝墓２基，掘立柱状遺構１基，溝状遺構２基，竪穴状遺構１基，時期不明の住居址１軒である。

縄文時代の住居址は、中期初頭五領ヶ台期５軒，中期中葉藤内期３軒，井戸尻期４軒，中期後葉曽利式期２軒が存在する。調査区東側は東方へ下る斜面となるため，縄文期の集落はさらに北方および西方に伸びるものと推定される。

弥生時代の住居址は，小判状の隅丸長方形を呈し，１号住を除く大半が主軸をほぼ南北方向

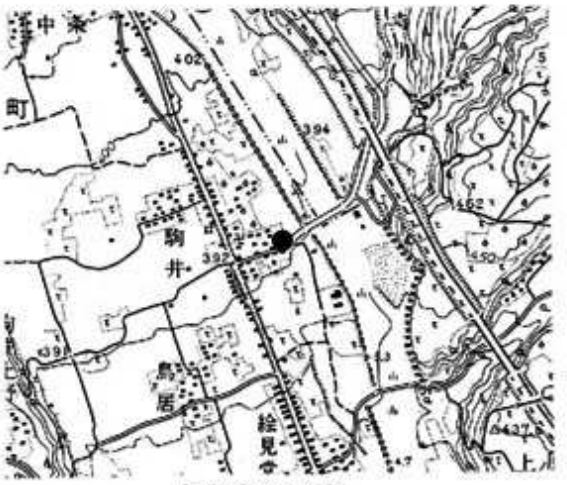
にとる。住居の内部構造は，入口部分に梯子受けと考えられる扁平のピットをもち，その右側にドーナッツ状の土盛り部と円形ピットを有する。柱穴は４本で，奥壁側柱穴間に炉が設けられる。炉址は火燃面に粘土を貼るものと地床炉が存在する。また発掘状況から火災住居と考えられるものが７軒ほど存在する。出土遺物はどの住居址も非常に少ない。出土土器からこれらの住居址は，弥生時代後期後葉から末葉に比定される。



第２図　上の平遺跡・遺構配置図

駒井遺跡

所在地	韮崎区藤井町駒井字砂宮神
事業名	県道韮崎増富線拡幅工事
調査期間	昭和60年7月22日～8月21日
担当者	保坂康夫
面　積	400㎡



駒井遺跡位置図

本調査は，県道拡幅工事に伴うもので，昭和60年5月27日に試掘調査を行い，遺跡の範囲を確定した後に本調査を行った。幅約5ｍの道路拡張部分のうち，各家への導入路，水道管，水路，電柱などを除いた部分を全面的に掘り下げた。その結果，縄文時代，弥生時代後期，古墳時代後期，奈良時代，平安時代，中世の遺物と，奈良時代末期から平安時代初頭の竪穴式住居址1軒，中世の開墾に伴うらしい穴1基を確認，調査した。

遺跡は，塩川の堆積作用により形成された，いわゆる藤井平のほぼ中央の，塩川河岸近くに位置する。藤井平には塩川に沿って小起伏や崖線もあるが，本遺跡の立地する地域はこの中でもかなり低位な場所である。標高は390ｍ。

遺跡の土層は，砂と礫とからなっている。純粋な砂層の中にレンズ状に礫層が挟在する場所もあり，旧河床，中洲，自然堤防といった所であったと思われる。また，土層下半部に鉄分の沈着が顕著で，ある時期，地下水位が非常に高かったものと思われる。遺物は，奈良時代末期から平安時代前半のものを主体とするが，その包含層の下位に弥生時代後期の遺物包含層も見い出された。

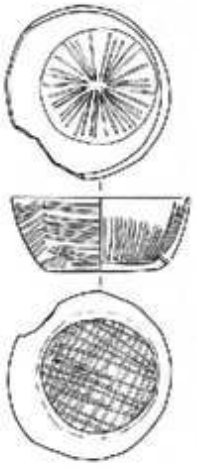
本遺跡で注目されるのは，奈良時代末期から平安時代初頭の遺構と遺物群である。住居址は，4分の1程度が調査できたが，東辺中央にカマドをもつ，1辺5ｍ程度の隅丸方形のプランであると思われる。上下2枚の床面があり，その間に20cmほどの間層があった。上下の住居址は，カマドの位置がほぼ同じで，住居址北辺については下位の住居址の方が50cmほど南にある。

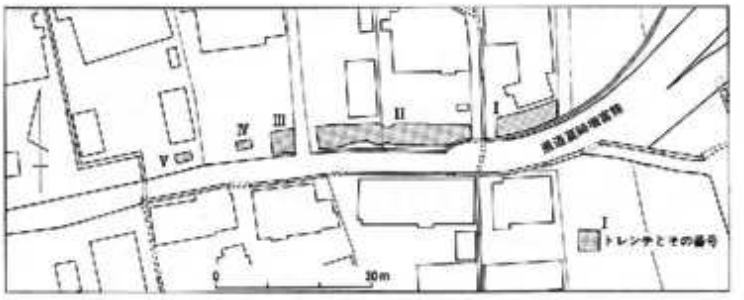
出土遺物は，須恵器と土師器がある。須恵器では，坏，高台付坏がある。高台付坏は，猿投窯の岩崎25号窯式から井ケ谷78号窯式古式，南摩窯の御殿山9号窯式古式，北武蔵の前内出1号窯式などに類似例がある。坏は，折戸10号窯式古式，井ケ谷79号窯式古式，御殿山37号窯式，将軍沢2Ｂ—2号窯式などに類似例がある。高台付坏は，8世紀中葉から9世紀前半，坏は，9世紀第1・2四半期の年代と考えうる。高台付坏は下部の住居址出土，坏は上部の住居址床

面から20～30cm浮いて出土している。土師器は，坏と甕とがある。坏は，坂本美夫，末木健，堀内真氏によって8世紀第4四半紀から9世紀第1四半紀の年代が与えられているものである。上部の住居址床面から20～30cm浮いて出土。

土師器甕は非常に多量に出土した。ハケメ調整のものとロクロ整形のものとがあり，後者が圧倒的に多い。ハケメ調整のものは，器壁が3～5mmと均等に薄いものと，5～7mmと厚く，胎土が白褐色のものとがある。ロクロ整形のものは，大型と小型がある。いずれも，ロクロの早い回転を利用して，底部から口縁部まで一挙に整形し，回転糸切りで切り離している。ロクロ整形以前に器壁の叩きを行った可能性がある。また，底部外縁や底面を薄くヘラ削りしたものもある。しかし，この時期の土師器甕にみられる一般的な技法である，ハケメ，ヘラ削り，そうした調整の後の口縁部のナデ，木葉底などがまったくみられないのが大きな特徴である。

大型のロクロ整形の甕は，現在のところ，九世紀代前後に，古代巨麻郡下に見られるのみで，周辺県にみられない。ところが，同時期の北陸や東北地域には類例があるようである。





駒井遺跡トレンチ配置図

於曽屋敷

所 在 地　塩山市下於曽
事 業 名　塩山警察署宿舎建設事業
調査期間　昭和60年9月17日～19日
担 当 者　八巻与志夫
面　　積　５００㎡

県史跡於曽屋敷位置図

1985年9月に塩山警察署の官舎建設計画が県指定史跡於曽屋敷の隣接地に具体化したため，遺構確認調査を実施した。

調査地は江戸時代の絵図によると，「作場」とあり耕作地であったことがわかるが，屋敷の大手門のすぐ外側であり中世には屋敷の重要施設が存在していたことが考えられる。そのため検出される遺構は外郭施設に係わるものか，大手門の防御施設が予想できる。

於曽屋敷は，塩山市下於曽字元族板に所在する典型的な中世土豪屋敷である。

江戸時代の絵図によれば於曽屋敷は，東西 110ｍ南北 153ｍの範囲高さ２ｍほどの土塁が二重に，外土塁と内土塁の中間には堀がめぐらされ，東と西に虎口が配されていたようである。しかし，現在では北側を除いて外側土塁は削平されており，堀も埋められている。

今回の調査対象地は，大手口に隣接した 200㎡程の宅地にある。

調査地の北側より，深さ１ｍ程幅８ｍ余りの内堀が検出された。この内堀には現在の虎口より６ｍ東に土橋状の張り出しがある。また堀の外側には幅40cm，深さ40cm程の溝が堀と平行して存在し，この溝の底部には約１ｍ間隔で柱穴が並んでいる。この溝より更に南４ｍには深さ50cmの柱穴が一個あり長さ15cm程の笄が出土している。また更に南３ｍには３ｍ間隔で東西に３個並んでいる。これらの柱穴群の南５ｍからは硬く締まった版築状の土層が10ｍ以上で東西に延びている。この土層からは中世中頃の土師質土器片が数多く出土している。

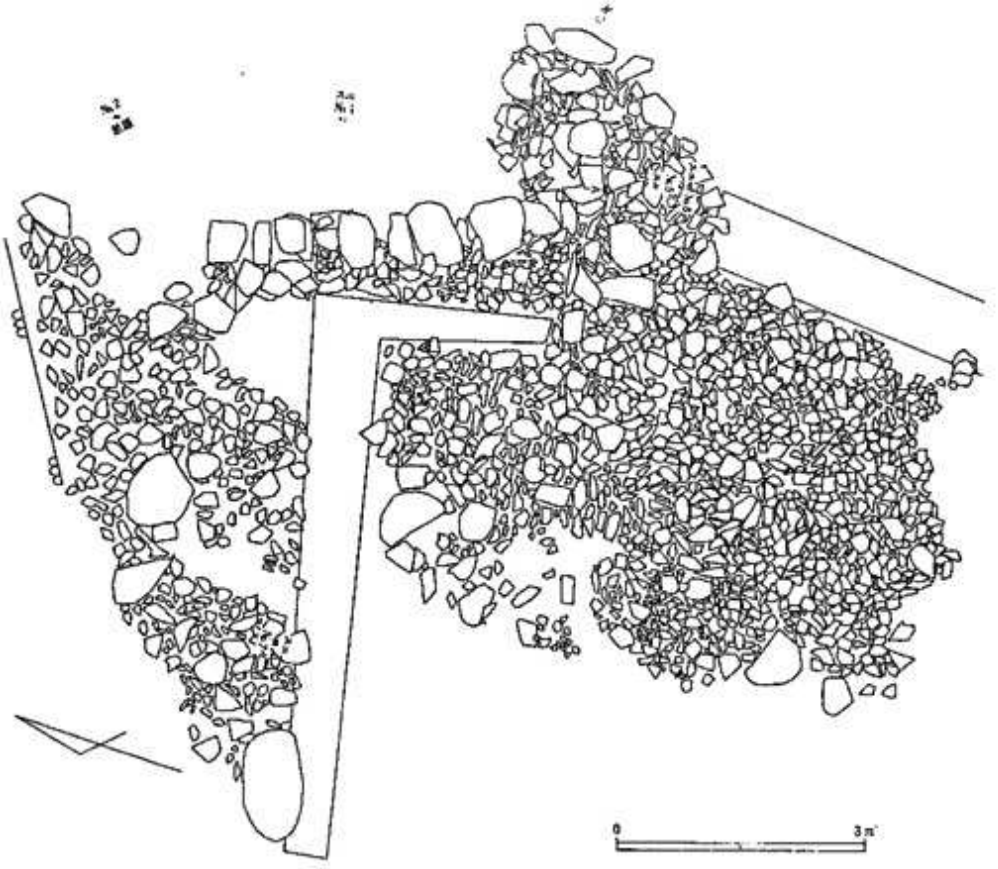
以上の状況から今回確認された遺構は於曽屋敷の大手口にあった土橋とそれに付随した柵列及び門址，外側土塁と考えられるのである。これらのことより，現在の虎口は当初から存在したものではなく，また絵図の示すとおり二重土塁であったことがわかるのである。

切附遺跡

所在地	東八代郡境川村藤巻字切附 273番地他
事業名	笛吹川農業水利事業
調査期間	昭和60年10月18日～11月22日
担当者	森　和敏
面　積	200㎡

甲府盆地の南東側に連なる曽根丘陵の奥まったやや北側に傾斜するロームの2次堆積地上に立地する。

遺構は農耕等で破壊されたためか検出できなかった。遺物は6世紀末から7世紀初頭の袋状鉄斧，平根式と尖根式の鉄鏃や須恵器甕，管玉等と縄文時代中期後葉の土器片が出土した。西に隣接して子の神古墳があったと言われるので，前者はその副葬品と思われる。



智光寺遺跡滝河原2号墳全体図

智光寺遺跡

所 在 地　東八代郡境川村藤垈字智光寺 335番地他
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和60年10月17日～12月11日
担 当 者　森　和敏
面　　積　1,300㎡

甲府盆地の南東側に連なる曽根丘陵の奥まったやや北側に傾斜する境川の氾濫原上に所在する。

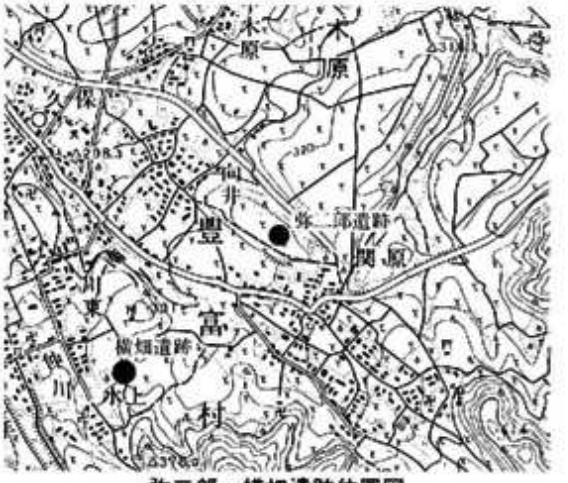
遺構は破壊された後期古墳と列石等を検出し，遺物は鉄鏃と須恵器破片，灰釉陶器破片少量が出土した。

古墳は滝河原２号墳と命名した。石室は西側壁と閉塞石の一部が残存しており，推定長は約3.8ｍであった。これによって石室の構築方法が一部明らかになった。墳丘は削平され西側と南側の基底部層が約 1.3ｍ～0.3ｍ 残っていた。この最下層は黒色腐食土層で，その上に礫層がのっていたので，上層は土層と礫になっていたかも知れない。また石室入口部から南に２列に約５ｍの列石が検出された。出土遺物は僅少であったが，鉄鏃等から，古墳の時期は６世紀後半から７世紀初頭に比定出来る。

弥二郎遺跡

所 在 地　東八代郡豊富村関原字弥二郎
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和60年10月21日～12月２日
担 当 者　保坂康夫
面　　積　４５０㎡

本調査は，水管埋設によって掘削される幅３～５ｍの部分を中心に行った。長さは 110ｍである。調査の結果，遺物としては，先土器時代の武蔵野Ⅱａ期と思われるナイフ形石器１点，縄文時代前期末，中期中葉，中期後半，弥生時代後期，中・近世の土器や石器が得られた。遺構としては，弥生時代後期後半の住居址３軒が得られた。



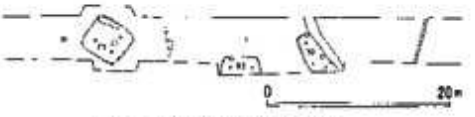
弥二郎・横畑遺跡位置図

遺跡の立地は，構造段丘である曽根丘陵である。細かくみると，断層と河川の活動によって寸断され孤立した台地状の平坦面上である。標高は，324 mから320 mである。

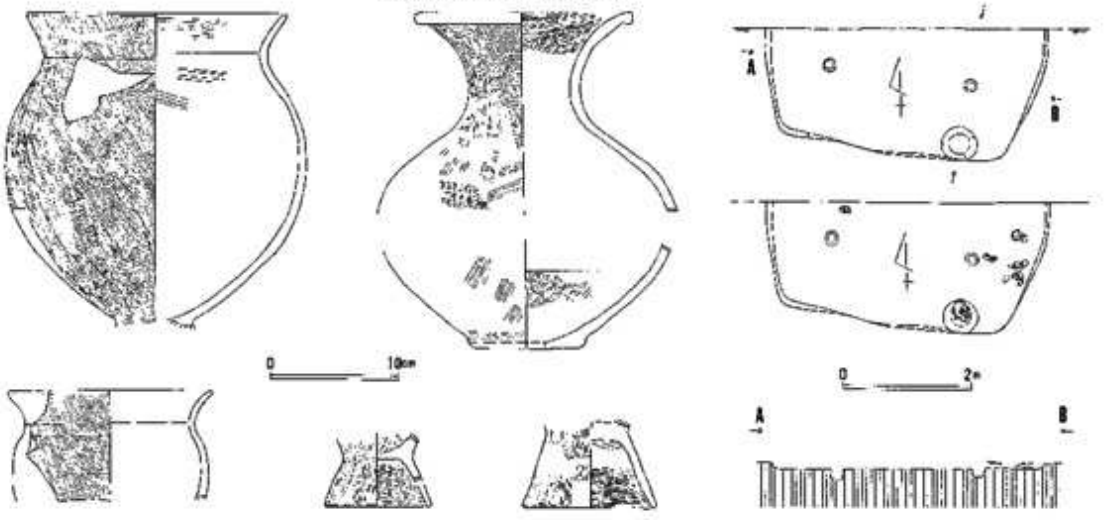
遺跡の土層は，ソフトローム層とハードローム層，両者に挟まれた黒色帯である。ソフトローム層より上位の土層は耕作土化している。ローム層は，東にむかってゆるやかに傾斜する。西側では，ローム層以下が切断されたように台地崖線に露出している。台地の東面と西面の形成過程や形成時期に大きな隔りがあるものと思われる。同様な状況は，横畑遺跡でも観察できた。

本遺跡出土の先土器時代石器は，切出形のナイフ形石器である。曽根丘陵上には，ナイフ形石器を出土した遺跡がいくつかあるが，いわゆる二側縁加工のものがほとんどである。また，県内見わたしてみても，切出形は報告例がない。近い時期のものとしては，米倉山遺跡の小型の基部加工のナイフ形石器1点が考えられるのみであろう。県内では，武蔵野IIa期のものは，非常に稀少であると思われる。

弥生時代後期後半の住居址は，耕作により壁の立ち上がりを5～10cmほど残すのみである。3軒のうち2軒はほぼ完掘し，1軒は半分を調査できた。いずれも隅丸方形のプランで，柱穴を4本もち，炉址と，貯蔵穴がある。炉址は，20cmほど掘りくぼめた後，土器を埋設するものと，角柱状の礫を埋没するものとがある。貯蔵穴は，住居址南東隅近くに設けられ，直径30cm，深さ30cmほどである。その一つに，台付甕形土器がほぼ完形で落ち込んでいた。



弥二郎遺跡遺構配置図



2号住居址出土土器　　2号住居址

横畑遺跡

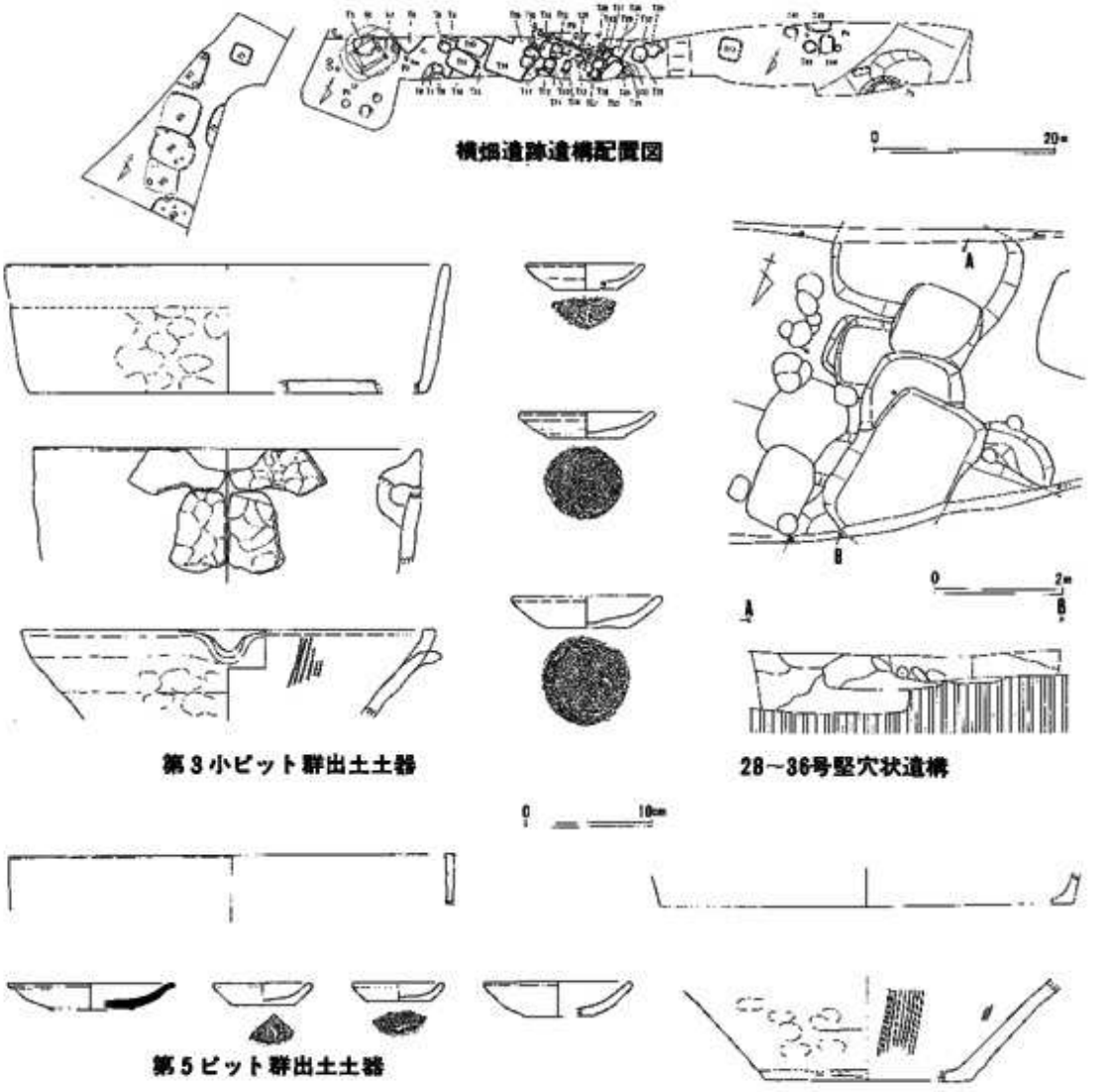
所 在 地　東八代郡豊富村大鳥居字横畑
事 業 名　笛吹川農業水利事業
調査期間　昭和60年11月2日～12月26日
担 当 者　保坂康夫
面　　積　900㎡

本調査は，水管埋設によって掘削される幅3～5ｍの部分を中心に行った。長さは，延べ160ｍである。調査の結果，遺物としては先土器時代の武蔵野Ⅱｂ期と思われるナイフ形石器1点，縄文時代前期末，中期中葉，中期後半，後期初頭の土器や石器，弥生時代中・後期，古墳時代前・後期，奈良時代，平安時代前半，後半，中・近世の土器や石器が得られた。遺構としては，縄文時代中期後半の埋甕3基を伴う住居址1軒，弥生時代後期後半の住居址3軒，平安時代の10世紀末の住居址1軒，12世紀代の住居址2軒，中世末から近世初頭と思われる竪穴状遺構44基，小ピット群5群が得られた。

遺跡の立地は，構造段丘である曽根丘陵の最奥部，丘陵と山地の接する部分である。曽根丘陵では更新世の比較的古い時期の火山岩屑流や火砕流，それを覆う背後の山地から供給された扇状地堆積物によって形成された平坦面が断層や河川の活動によって寸断され，個々に独立した台地となっている。曽根丘陵の遺跡のほとんどは，こうした台地状の平坦面に立地している。本遺跡の標高は，329ｍから320ｍである。

遺跡の土層は，ソフトローム層とハードローム層，両者に挟まれた黒色帯である。ソフトローム層より上位の土層は耕作土化しているらしいが，発掘区中央の竪穴状遺構が集中する地域では，一部それらの遺構を覆い，中・近世土器群のみを包含するプライマリーな土層が分布する。ローム層は，平坦面から東にむかってゆるやかに傾斜するが，東側斜面では黒色帯以上がかなり削られている。西側では，ローム層以下が切断されたように，台地崖線に露出し，台地の東面，西面の形成過程や形成時期に大きな違いがあることが窺える。

本遺跡で注目されるのは，中・近代の遺構・遺物群である。竪穴状遺構は，隅丸方形ないしは隅丸長方形を主体とし，1辺1ｍ程度から5ｍ程度のものまで，大小さまざまである。深さも，20～30cmほどの覆土をようやく残存させているものから，1ｍほどのものまでさまざまである。切り合い関係も複雑である。小ピット群は，径20～30cmほどの小ピットが群集するもので，最も多いもので51基が群集する。小ピットの深さは，10cmほどから80cmほどまでさまざまである。竪穴状遺構の主軸はおのおのの平行したり直交する関係にある。小ピット群の小ピットの大半は東西方向，南北方向の配列性が窺える。また，竪穴状遺構の主軸方向と小ピットの配列方向もほぼ一致する。さらに，両者は，遺跡背後の小山をＬ字状に切り取ったような地形の中にあるが，そのＬ字の段の方向ともほぼ一致する。こうした地形の掘削，削平と遺構の形成とがほぼ同時に行われたいくつかの傍証もある。



出土土器は，土師質の小皿，内耳土器，擂鉢などが主体である。陶器は，志野焼小皿1点，黄瀬戸の皿片1点が主なもので，あとは16世紀以後と思われるものが数片あるのみである。土師質小皿は，さまざまな形態があるが，16世紀の武田氏館跡出土土器に近似するものが多い。内耳土器は鍋形が主体で若干鉢形らしいものがあるが，ほうろく形がない。器壁が薄く硬質で口唇が平坦なものと，器壁が厚く軟質で口唇が丸いものがある。出土地域を異にしており，時期差と考えうるが前後関係は不明である。特に後者は長野県御社宮司遺跡で16世紀代とされるものに近似する。以上の点から，おおむね16世紀以後，近世に入ってもそう新しくないものと思われる。なお，銅と思われる溶融物付着土器が多量に出土しており，特異な鍛冶集団の存在も考えられる。

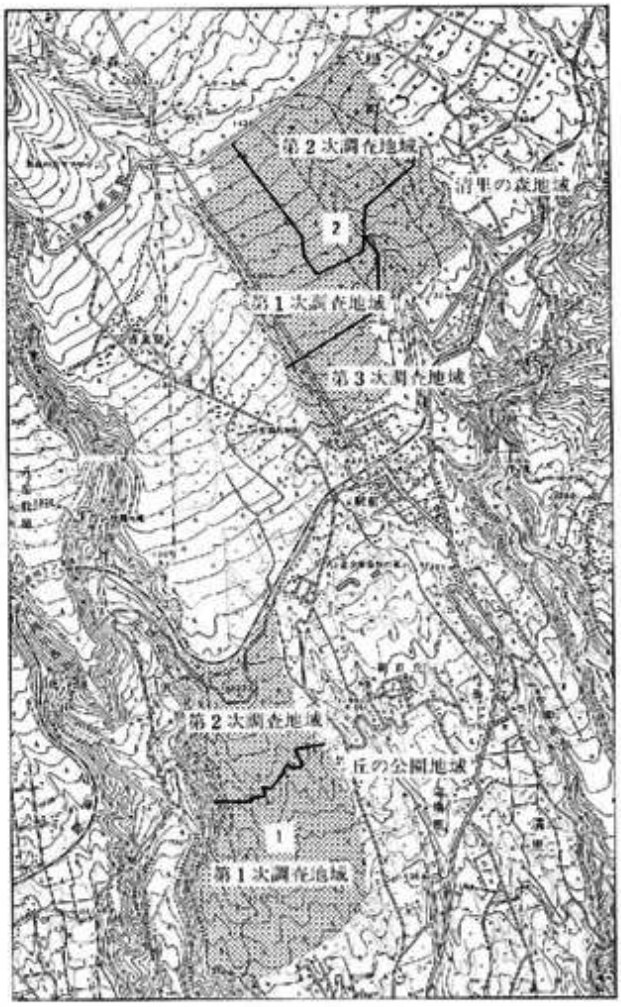
八ケ岳東南麓遺跡分布調査（第３次）

対象地域　北巨摩郡高根町清里「丘の公園」地内，「清里の森」地内
事 業 名　八ケ岳東南麓遺跡分布調査
調査期間　昭和60年10月３日～10月９日
担 当 者　保坂康夫
面　　積　800,000㎡

本調査は，八ケ岳東南麓の清里地域における大規模開発事業地内について，文化庁の国庫補助を得て行った遺跡確認調査である。県企業局による総合スポーツ・レクリエーション施設「丘の公園」地内と，県林務部による別荘分譲地「清里の森」地内の二つの地域で行ってきたが，最終年次の今年度は，「清里の森」地内のみを行った。

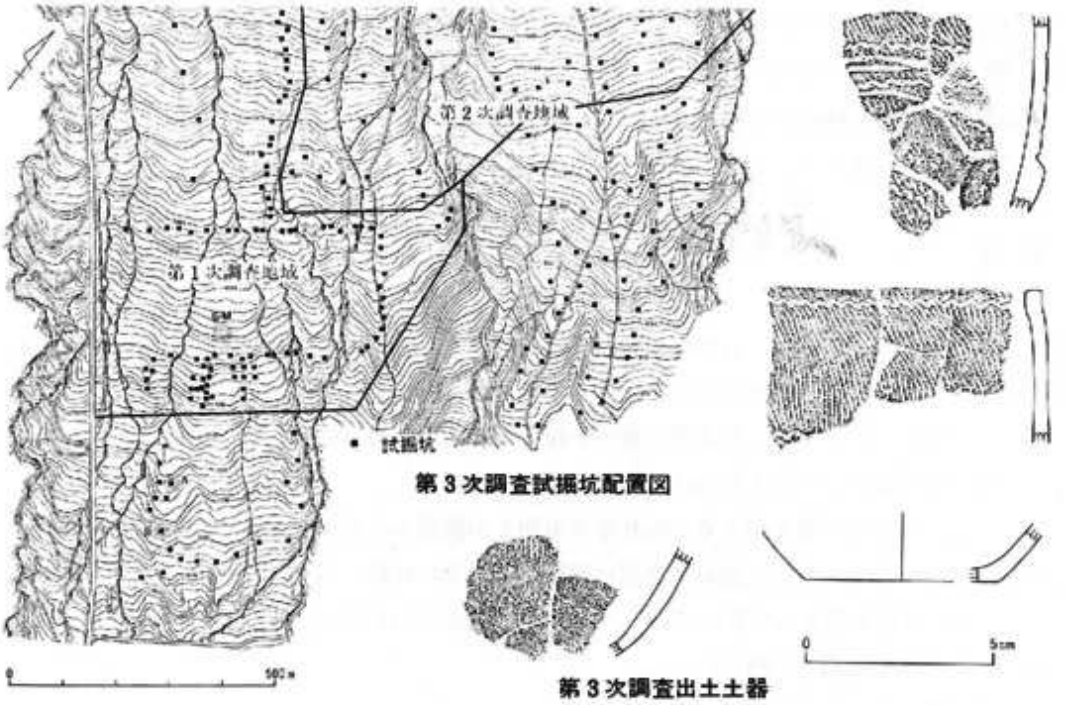
試掘抗は，1.5ｍ×1.5ｍほどの大きさで，道路建設予定地を中心に50ｍ間隔で設定し，合計79ケ所設定し掘り下げた。

本地域は，広範囲に巨礫の原野が存在する。土層をみると，純粋なローム層のみの地域が非常に少なく，礫混入ローム層や礫層のみられることが多い。また，中小河川が無数にみられ，こうした河川の堆積作用，削剥作用がかなり進んでいることが窺えた。



調査対象地域図

本地域の標高は 1,300ｍ～1,450ｍである。丘の公園地域は 1,120ｍ～1,250ｍであり，丘の公園地域にくらべて高所にある。また，丘の公園地域は川俣川崖線沿いにあるが，清里の森地域は川俣川や大門川の大河川からやや離れている。高標高であるという点は，八ケ岳の山体により近い位置にあるということであり，大河川から離れるということは，山体崩壊に伴う礫の供給を全面的に，しかも多量に受けることとなると考えられる。実際，丘の公園地域では，ロー



第3次調査試掘坑配置図

第3次調査出土土器

ム層台地の残存率が高く，川俣川に近い地域ほどローム層台地の残りがよい。したがって，本来念場ヶ原地域を覆っていたローム層が，広範囲に削られ，消失している可能性がある。

出土した遺物や遺構は，縄文時代中期中葉の土器が1カ所，縄文時代の石鏃が1カ所である。また，土器出土地点は，ハードローム層まで削平されたうえ，黒色土を含むプライマリーな土層が堆積しており，住居址の存在が予想された。なお，テニスコートの工事中に五輪塔の水輪1点と，縄文時代の磨製石斧1点が発見された。工事終了後に連絡を受けたため，遺跡の確認には至らなかったが誠に残念である。

史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳（第３次）

所 在 地　東八代郡中道町下曽根
事 業 名　史跡整備事業
調査期間　昭和60年７月26日～
担 当 者　坂本美夫

墳　丘

墳形は前方後円墳であるが，前方部前縁が直線状でなく，わずかに中央に向って剣先状に突出する曲線状を呈することが想定されるところとなった。，墳端において据石と考えられる施設がいくつか検出され，これらを基準に規模を復元すると，全長 169ｍ，後円部後92ｍ，同高さ15ｍ，前方部幅65ｍ，同高さ8.5ｍほどの規模となる。

墳丘の築成は葺石と築成面と考えられる平坦面とが検出されたことから，前方部２段，後円部３段の築成と捉えられた。葺石は基部に直径30cm前後の比較的大型の礫を据え，それ以上をやや小振りの礫を主体として葺いている。その範囲は現状では基部から２ｍ前後に見られるが，墳端に堆積する礫の量からすれば，墳丘全体を覆っていたと見ることができる。

埴輪列は後円部の下段築成面において埴輪の基部が墳丘の盛土に喰い込んだ状況で検出されたことからほぼ間違いないものといえる。上段の築成面については帯形埴輪（第１図）などの大形の破片が出土したものの，明確にならなかった。

銚子塚古墳出土壺型埴輪

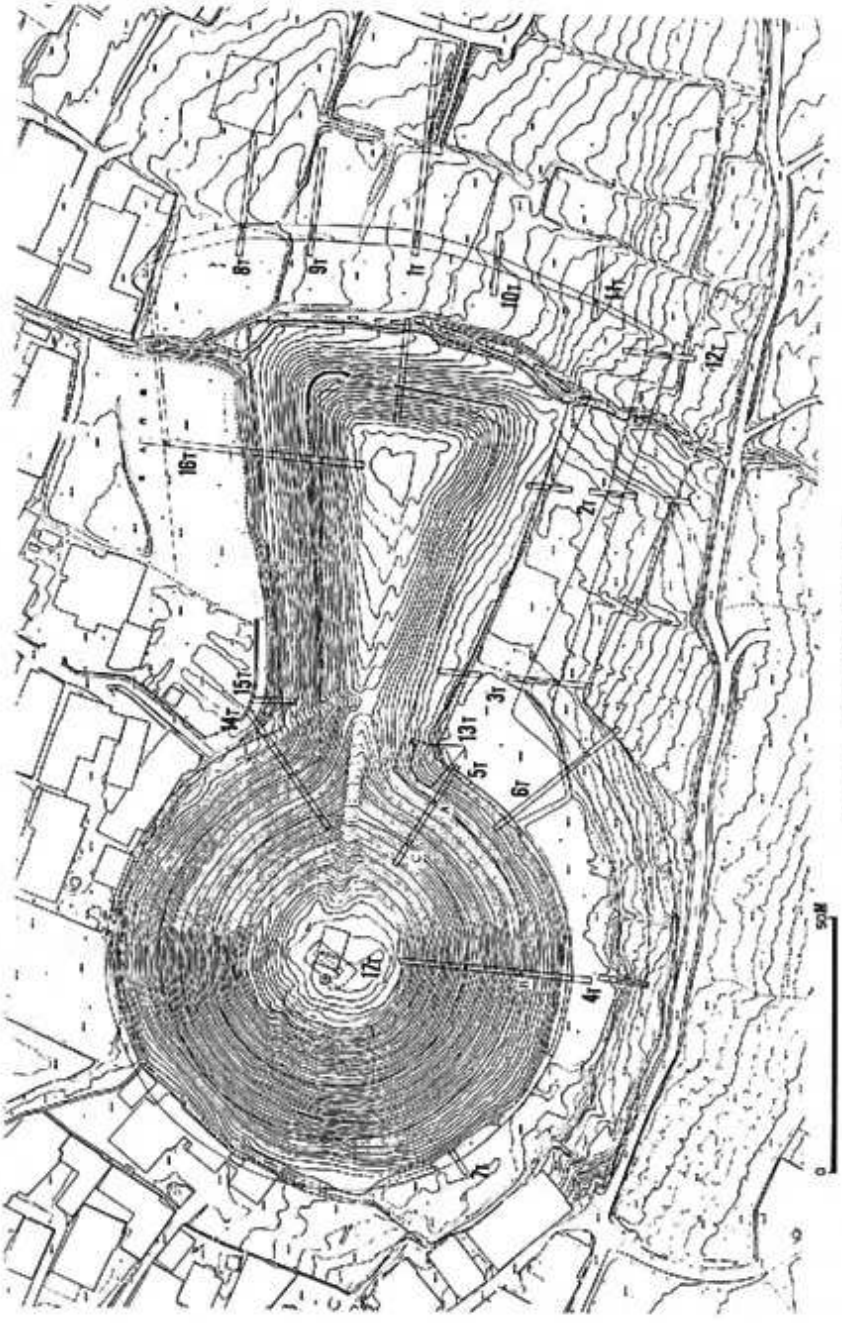
周溝

周溝は墳丘の北側で現地表より0.7ｍ，南側で平均２ｍ前後で周溝底と考えられる礫層などに達する。一重であるが，南側は傾斜面の関係で２段にわたって削平された可能性を示す地山の変化が捉えられた。このため幅は南側で最も広くなり，14～25ｍを測る。また

前方部正面においては，墳丘の形状に沿って湾曲している。なお南側くびれ部の周溝内より，木製品が土師器などと共に出土した。

出土遺物

埴輪片（壺形埴輪，円筒形埴輪，朝顔形埴輪など），土師器片，木製品（円盤状・鳥型状製品）など。



第2図　銚子塚古墳平面図

その他の事業

山梨県内では年平均50件を越える発掘調査が行われているが，調査期間や地理的条件などの制約から一般県民に調査の内容や遺跡の性格が周知されない傾向がある。そのため，特色ある遺跡の調査成果を発表する『遺跡発表会』を3月と9月の年間2回開催することにした。この事業は，山梨県考古学協会と共催として，昭和59年度よりスタートした。

昭和59年度報告遺跡

1.上野原遺跡　東八代郡中道町所在
縄文時代中期の住居址が17軒，配石遺構1基，土壙約80基，溝4本が検出された。
2.根古屋遺跡　北巨摩郡白州町所在
縄文時代前期の住居址が1軒，中期の住居址が12軒，土壙が26基などが検出された。
3.中田小学校遺跡　韮崎市所在
縄文時代の住居址1軒，弥生時代の住居址3軒，奈良時代の住居址4軒，平安時代の住居址18件，中世の住居址3軒が検出された。
4.柳坪遺跡　北巨摩郡長坂町所在
縄文時代の住居址9軒，弥生時代の住居址1軒，古墳時代の住居址1軒，平安時代の住居址42軒，掘建遺構5棟，中世の住居址が1軒検出された。
5.東姥神B遺跡　北巨摩郡大泉村所在
縄文時代中期の住居址1軒，平安時代の住居址8軒，掘建遺構10棟などが検出された。
6.前田遺跡　北巨摩郡小淵沢町所在
平安時代の住居址10軒，掘建遺構4棟などが検出された。
7.小和田遺跡　北巨摩郡長坂町所在
平安時代の住居址が18軒，中世の住居址40軒，地下式土壙13基などが検出された。また，古瀬戸灰釉四耳壺に収められた銭3貫文，その他3千枚が出土した。

60年度報告遺跡

1.上の遺跡　東八代郡中道町所在
縄文時代の住居址14軒，弥生時代の住居址16軒，方形周溝墓2基などが検出された。
2.史跡銚子塚古墳　東八代郡中道町所在
円筒埴輪，朝顔形埴輪，壺形埴輪が墳丘上トレンチから出土した。
3.石堂B遺跡　北巨摩郡高根町所在
縄文時代後期中葉を中心とした大配石遺構が検出された。
4.築前原墓跡　東八代郡一宮町
礎石建物1棟，掘建遺構9棟，溝8本，竪穴住居6軒が掘に囲まれた状態で検出された。
5.一の森経塚　甲府市所在
3基の経塚から外容器が4個体，蓋として使用された山茶碗などが出土した。
6.権現堂遺跡　南巨摩郡増穂町所在
泥塔の生産遺跡として注目され，2回の調査で数百個の泥塔が焼土とともに出土した。

1986年 3 月25日　印刷
1986年 3 月31日　発行

年　　報　2

発行所　山梨県埋蔵文化財センター
印刷所　株式会社　少 國 民 社